

第4節 内無川4地区

1 調査の概要

岡遺跡の内無川4地区は、河口近くの大野川右岸の丹生台地北東端、大分市大字一本字内無川に位置している。遺跡周辺の地形は、やせた尾根と小さな谷部が交互に幾重にも続く雑木林である。内無川4地区はそのような小さな丘陵部に位置する。丘陵は南北に長く延び、標高は約77~80mを呈する。この丘陵の南半分の南西側や南側は、かつて土採場であった様子で、大きく削り採られた地形をそのまま残していた。

遺跡の当初の調査範囲は、長さ約100m、幅約20mの面積約2,000㎡であったが、基部付近の崖面から竪穴住居跡が発見されており、関係諸機関と協議の結果、その付近を500㎡程度拡張して調査区に加えた。

発掘調査区は南北に長い地形を考慮し、東から西に10mの1、2、3…、北から南に8mのA、B、C…と10×8mの調査区を設定した。調査区内には、世界測地系座標の、東西のX軸を25230、南北のY軸を66390とした交点を発掘調査区内に設定している。

丘陵は南北に長い痩せ尾根で、中央部は鞍部を形成している。発掘調査は、試掘調査の結果に基づいて、表土を約20~30cm前後重機で剥ぎ、遺構を検出する作業から行った。

調査の結果、弥生時代の竪穴遺構は、丘陵の基部~鞍部に主体的に分布し、北端部には遺存していない。一見、集落跡と墓地との機能分化を暗示しているようでもあるが、カメ棺墓の遺存状態や遺物の分布状態等を総合的に判断すると、遺構の残存状態に起因するものと推量できそうである。

主要な検出遺構としては、弥生時代後期の竪穴遺構が12基と小児用カメ棺墓が5基出土している。その他の遺構としては、旧石器時代~縄文早期の集石遺構4基と古代の炭焼窯7基が検出されている。竪穴は、弥生時代後期の竪穴遺構、古墳時代前半期の竪穴遺構、土器の分布域から当時の竪穴住居跡の残映と推量できそうな遺構等が検出されている。弥生時代後期の竪穴住居跡は、遺構の平面プランが不明瞭で、これに伴う主柱穴も断定できるものは少なかった。

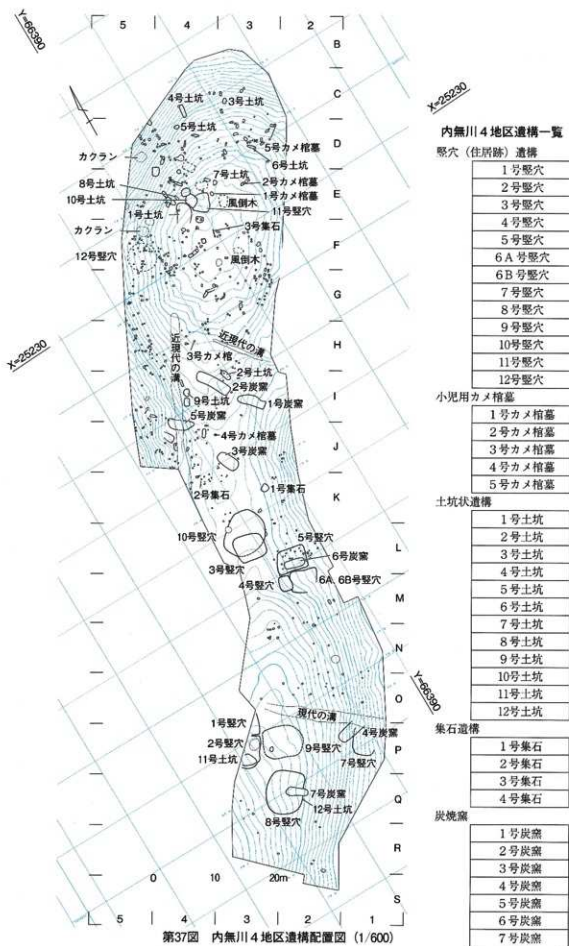
小児用カメ棺墓は5基検出されている。カメ棺墓はアカホヤ層に掘り込まれたもので、その基部を僅かに留めたものが殆どであった。

出土遺物としては、弥生時代後期の土器が主体を占め、旧石器時代の剥片類、古墳時代前半期の土器、古代の土器等が若干出土しているのみである。

2 基本層序

内無川4地区は雑木林に覆われた北・南に長い丘陵であり、丘陵中央部では心持ち低い鞍部を形成している。土層の堆積は地形によって異なり、3層~5層は丘陵の北側の先端部に堆積している。基本的な層序は次のようになる。

- 1層 表土層。堆積は5~20cm。暗褐色の腐植土層である。
- 2層 褐色土層。堆積は5~20cm。表土層とアカホヤ層の混じった土層で弥生時代の遺物を包含する。遺構はこの層から3層、4層、5層、6層へと掘り込まれている。
- 3層 黄褐色アカホヤ土層。堆積は約2~10cm。地形環境によって部分的に遺存する黄な粉のようなアカホヤ層である。弥生時代のカメ棺や浅い竪穴住居跡の一部はこの層に掘り込まれている。
- 4層 茶褐色土層。堆積は5~20cm。AT層と凝灰岩の風化した細かい灰褐色の砂質土層の混じった土層である。テフラ分析によると4層は始良 Tn 火山灰が検出されている。
- 5層 灰褐色粒質土層。堆積は5~10cm。凝灰岩の風化した細かい砂質土層である。この層も地形環境によって部分的な堆積として確認できる。テフラ分析によると、この凝灰岩風化土層は、阿蘇IV風化土層や一木凝灰岩や中安火山灰とよばれるものではないという。色調は遺構検出の鍵層となる。
- 6層 桃褐色粘質土層。堆積は20~30cm。弥生時代の深い竪穴住居跡等はこの層まで掘り込まれている。



第37図 内無川4地区遺構配置図 (1/600)

内無川4地区遺構一覧

竪穴 (住居跡) 遺構

1号竪穴
2号竪穴
3号竪穴
4号竪穴
5号竪穴
6A号竪穴
6B号竪穴
7号竪穴
8号竪穴
9号竪穴
10号竪穴
11号竪穴
12号竪穴

小児用カメ棺蓋

1号カメ棺蓋
2号カメ棺蓋
3号カメ棺蓋
4号カメ棺蓋
5号カメ棺蓋

土坑状遺構

1号土坑
2号土坑
3号土坑
4号土坑
5号土坑
6号土坑
7号土坑
8号土坑
9号土坑
10号土坑
11号土坑
12号土坑

集石遺構

1号集石
2号集石
3号集石
4号集石

炭焼窯

1号炭窯
2号炭窯
3号炭窯
4号炭窯
5号炭窯
6号炭窯
7号炭窯

3 調査の成果

(1) 竪穴遺構

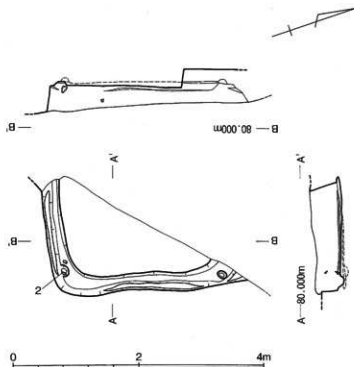
1号竪穴 (第38図)

調査区の南端部に位置する方形の竪穴である。竪穴は南東コーナーを残すもので、規模は判然としませんが、残存する壁溝のラインから推測すると、竪穴の北東コーナーの一部も想定できそうである。つまり、南北の一辺が約3m程度の小型の方形竪穴を推察できる。確認面から床面までは約40~50cmであり、竪穴の隅には幅10~20cm、深さ5~10cmの壁溝が廻っている。竪穴は大きく削平されており、その一部が遺存しているのみである。主柱穴などは確認できない。1号竪穴は2号竪穴と接する関係にある。

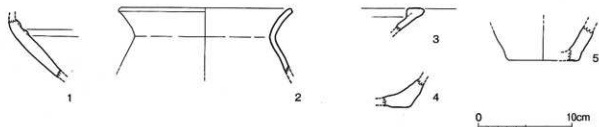
出土遺物 (第39図)

1は土器周辺が丸くローリングを受けており顕著な磨耗が認識できる。土器は壺形土器の頸部~肩部の破片であり、突帯が二条廻っている。2は甕型土器の口縁部である。口径18.2cmを呈し、頸部径は15cmで表裏は撫で調整を施す。表裏は橙褐色を呈する。3は口唇部が厚く、平坦で内側に張り出し気味な高坏の坏片である。4、5は平底部である。5は底径7.4cm。

1号竪穴の時期は弥生後期の前半にあたる。



第38図 内無川4地区1号竪穴実測図 (1/60)



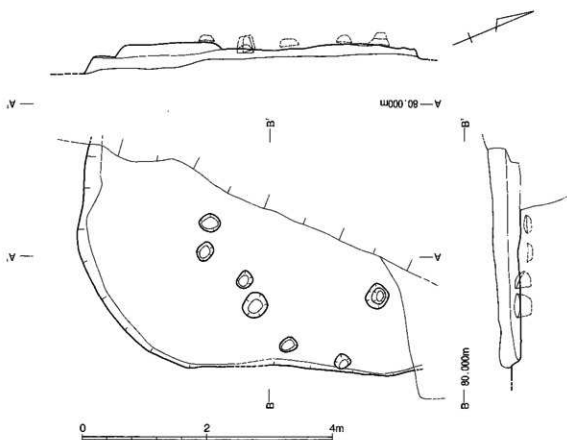
第39図 内無川4地区1号竪穴出土遺物実測図 (1/4)

2号竪穴 (第40図)

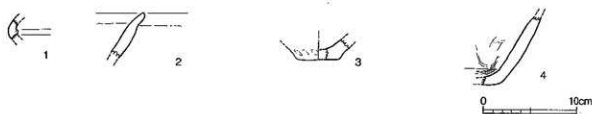
調査区の南端部に位置する隅丸の竪穴である。竪穴は南東コーナーを残すもので、規模は判然としなが、残存する竪穴プランのラインから推測すると、1号竪穴と接する位置にある。確認面から床面までは約20~25cmであり、竪穴の床面には幾つかの柱穴があり、南コーナーには南北径1.85m、東西径1.75m、深さ約20cmの円形土坑が位置していた。竪穴は大きく削平されており、その一部が遺存しているのみである。2号竪穴は1号竪穴と接する関係にある。

出土遺物 (第41図)

1は壺形土器の頸部片である。一条の断面三角突帯が廻っている。2は鉢形土器の口縁部であろう。3は底がやや丸く影みを持つ平底の底部である。底径4.5cm。4は丸平底部である。2号竪穴の覆土中には細片土器しか出土しておらず時期は決めがたい。



第40図 内無川4地区2号竪穴実測図 (1/60)



第41図 内無川4地区2号竪穴出土遺物実測図 (1/4)

3号竪穴 (第42図)

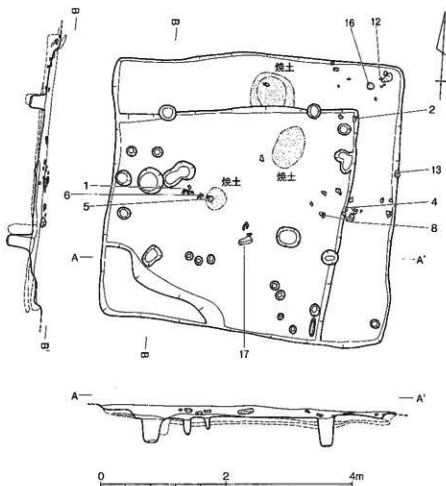
調査区のはは中央部の南側に位置する方形竪穴である。機能的には竪穴住居跡であろう。竪穴の平面プランは、東西約4.5m、南北約4.4mの略正方形を呈し、北壁側と東壁側には幅約80~100cmで、床面より心持ち高いベッド状遺構が鉤状に遺存していた。竪穴は確認面から床面までは約15~20cmであり、中央部に直径約40cmの焼土、中央よりやや北東側に長径70cm、短径40cmの焼土、北壁ベッド状遺構上に長径70cm、短径50cmの焼土が位置していた。主柱穴は判然としないが、床面とベッド状遺構との境にある3本と南西隅の1本との4本であろう。竪穴の中央部付近には人頭大の台石・石皿として使用された河原礫が位置し、床面近くの覆土内には土器片が多数散在していた。

3号竪穴は10号竪穴を切る関係にある。

出土遺物 (第43図)

1は袋状を呈する複合口縁部の壺形土器である。口縁部は尖り気味で、口径12cm、口縁最大径は13.8cmである。胎土は暗赤褐色で脆い状態である。2は壺形土器の頸部片である。断面三角突起が一条廻っている。頸部径は9.5cmである。3、4は壺形土器の口縁部である。3は口径23cmで頸部径は19cmである。4は口径22cmで頸部径は18.5cmである。

5は脚付鉢である。口径10.8cmを最大径とし、そのまま傘んで底部に至る。底部の折れ部径は3.7cmでこれに脚部が付くものである。表裏とも横撫で調整。6はミニチュアの甕形土器のほぼ完形品である。口縁部は緩く外反し、胴部は張らずに上げ底部にいたる。表面頸部付近には横刷毛目痕を残し、表裏は指頭裏を残す撫で調整である。口径5cm、頸部径4.4cm、胴部最大径4.6cm、



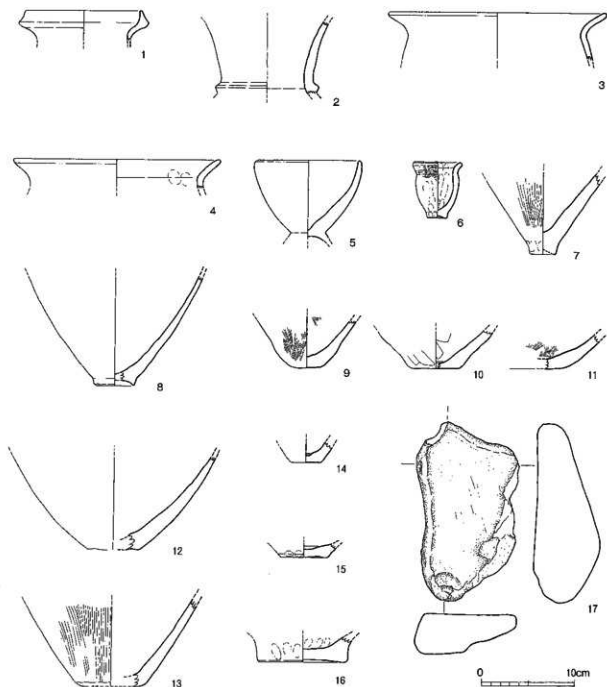
第42図 内無川4地区3号竪穴実測図 (1/60)

底部径2cmである。

7～16は底部付近の破片である。7は甕形土器の底部で底径2.9cm。8の甕形土器の表裏は撫で調整で、底部は心持ち上げ底を呈し、底径3.5cmである。9は底径3.6cm、10は底径3.6cm、12は底径5.6cmで丸底に近い平底である。9は表裏に刷毛目調整痕を残す。12は表裏撫で調整。いずれも甕形土器の底部であろう。13は底径6.4cmを測る甕形土器の平底である。表面に刷毛目調整痕を残す。14は底径3.2cmを測る。15は底径5cmを測る。16は底径9.4cmを測る甕形土器の平底部である。表裏は指頭痕を残す撫で調整で、底部は心持ち上げ底状を呈する。

17は台石・石皿として使用された川原礫である。中央部が使用による研磨で心持ち窪んでいる。最大長18.8cm、最大幅11cm、厚さ4.2cm、重さ1400gである。

3号竪穴の時期は弥生後期中葉～後葉にあたる。



第43図 内無川4地区3号竪穴出土遺物実測図(1/4)

4号竪穴 (第44図)

調査区の中央部よりやや南に位置する小型竪穴である。この付近は長い調査区の中央部に当たり、地形的には、北部や南部に比較して若干低い鞍部の位置に相当する。

竪穴の平面プランは、東西約2.5~3.2m、南北5.5mの隅丸長方形が変形した形態を呈し、竪穴というより不定形土坑とも考えられる。竪穴の北西隅には床面より若干低い部分がある。確認面から床面までは約20~70cmであり、床面には幾つかの柱穴が遺存している。竪穴東側の壁は一部不明であるが、6A号竪穴を切る関係に位置している。

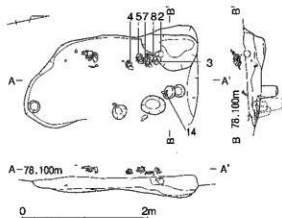
竪穴内には床面から20~50cmも浮いて完形土器やミニチュア土器が複数出土している。出土遺物は地形の傾斜に沿って西側から東側への傾斜があり、西側から投げ込まれた様相として把握できる。

出土遺物 (第45図)

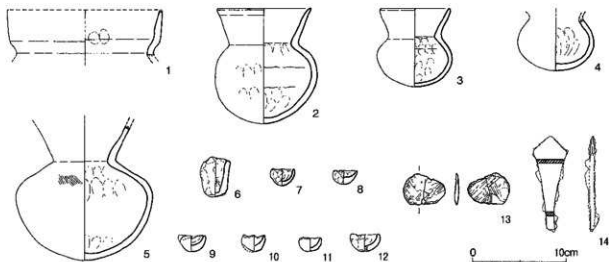
1は複合口縁の壺形土器の破片である。口縁は屈折しつつやや外反し、頸部で括れる特徴的なものである。2は小型で丸底の壺形土器の完形品である。外傾する口縁部の先端は心持ち外開きを呈する。体部の表裏は横撫で調整され、部分的に指頭痕跡を残している。口径9.8cm、頸部径7.4cm、胴部最大径10.8cm、器高12.1cmである。3はやや口の開いた小型の丸底壺である。表面は撫で調整、内面には指頭痕跡を残している。口径7.2cm、頸部径5.6cm、胴部最大径8cm、器高8.2cmである。4は口縁部を欠損した丸底壺の体部である。表面は撫で調整、内面には指撫

での指頭痕跡を残している。頸部径5.6cm、胴部最大径8.2cmである。5は口縁部を欠く丸底の壺形土器である。頸部は紋まり胴部がやや誇張される。表面には刷毛目痕跡、内面には指頭痕跡を残している。頸部径6.5cm、胴部最大径14.5cmである。

6~12は手捏のミニチュア土器である。6はコップ状を呈し、口径2.5~2.7cmで器高4.1cmである。表裏に指押さえ痕跡を残す。7~12は小さな丸底の鉢型土器である。表裏に指押さえ痕跡を残す。7は口径2.3cm、器高1.8cm。8は口径2.4cm、器高1.5cm。9は口径2.8cm、器高1.6cm。10は口径2.2~2.5cm、器高1.8cm。11は口径2.2cm、器高1.4cm。12



第44図 内無川4地区4号竪穴実測図 (1/60)



第45図 内無川4地区4号竪穴出土遺物実測図 (1/4)

は口径3cm、器高1.8cm。

13は楕円状の扁平な垂飾品である。周縁や表裏を研磨し整形している。一箇所に細い穿孔がある。最長3.2cm、最大幅4.4cm、厚さ0.1~0.4cm、重さ8.5gである。滑石製。

14は鉄鏃である。最大長10.2cm、最大幅3.7cm、厚さ0.4cm、重さ31.4gである。

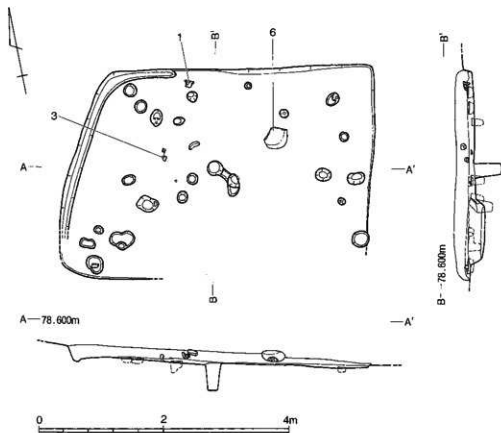
4号竪穴の時期は古墳時代前期後半~古墳時代中期前半にあたる。

5号竪穴 (第46図)

調査区の中央部よりやや南に位置する長方形の竪穴である。この付近は長い調査区の中央部付近に当たり、地形的には、北部や南部に比較して若干低い核部状の位置に相当する。

竪穴の平面プランは、東西約3.3m、南北4.9mの歪な長方形を呈する。竪穴南側の壁は一部不明である。確認面から床面までは約10~20cmであり、床面には多数の柱穴が遺存している。西壁には幅約10cmで深さ約5cmの壁溝が通っている。5号竪穴は4号竪穴や6号竪穴と接する位置に遺存し、6号炭窯に切られる関係にある。

竪穴内の覆土には土器片などが包含されているが、竪穴中央部のやや東寄りには一抱えもある自然礫が石皿や台石として使用され、そのまま遺存していた。5号竪穴の機能を推察できる資料である。

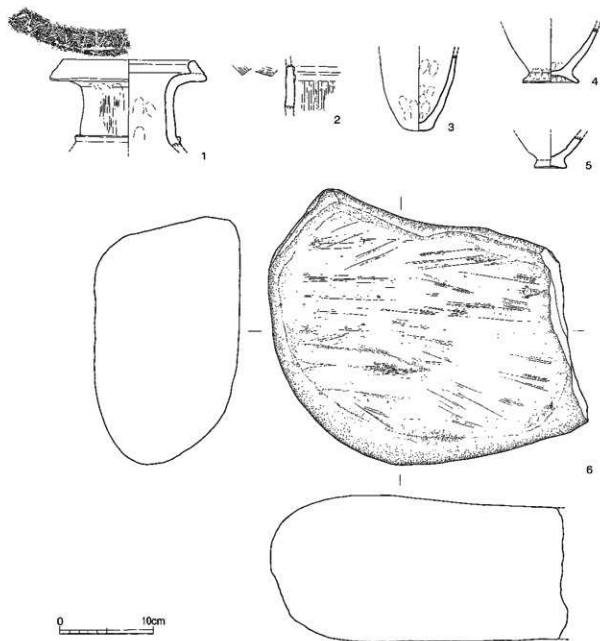


第46図 内無川4地区5号竪穴実測図 (1/60)

出土遺物（第47図）

1は壺形土器の複合口縁部の破片である。口縁部の立ち上がりは低く、外面には拙い櫛掻波状文が一条施文されている。頸部は太く長い。一条の断面の三角突帯が廻っている。表面は刷毛目、内面は指頭痕を残す撫で調整。2は二条の刻み目のある断面三角突帯を施文する。3は底径1.8cmの平底部である。表裏は指頭痕を残す撫で調整。4は底径3.4cmで心持ち上げ底気味の平底。5は底径6cmで心持ち上げ底気味の脚台付鉢の平底部。

6は石皿や台石として使用された一抱えもある川原礫である。表面には研磨痕や光沢が残っている。最大長36.8cm、最大幅31.5cm、厚さ16.6cm、重さ29kgである。



第47図 内無川4地区5号竪穴出土遺物実測図（1/4）

6A号竪穴 (第48図)

調査区の中央部のやや南方に位置する長方形プランの竪穴である。5号竪穴に接して位置している。この付近は長い調査区の中央部付近に当たり、地形的には、北部や南部に比較して若干低い鞍部状の位置に相当する。竪穴南東コーナーは巨木の根が覆い判らない。竪穴の西壁は4号竪穴に切られる関係にある。

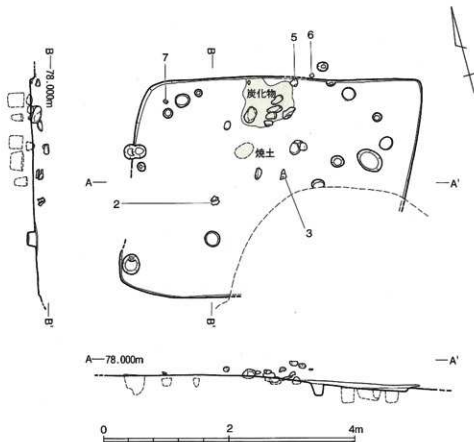
竪穴の平面プランは、東西約3.4m、南北約4.5mを呈する。確認面から床面までは約3~5cmであり、中央部付近に長軸35cm、短軸20cmの楕円状の焼土が位置し、やや北側には径80cmの円状に炭化物が位置している。炭化物の周辺には拳大から人頭大の川原礫が持ち込まれていた。竪穴内には柱穴が多数あるが、この竪穴に伴うものかどうかは判然としない。

出土遺物 (第49図)

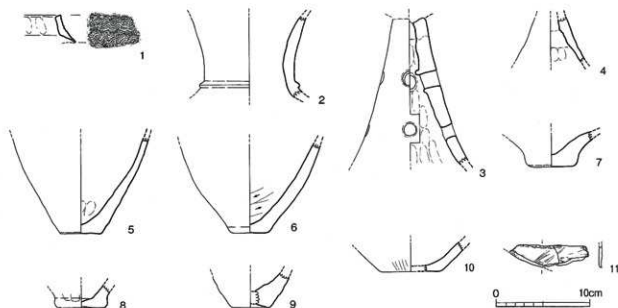
1は複合口縁部の破片である。断面が逆「く」の字に立ち上がる面に、二条の櫛歯波状文が施文されている。2は複合口縁の壺の頸部である。一条の断面三角突帯が廻っている。表裏は撫で調整。頸部径は9.5cm。3は高環の脚部である。脚部付け根部径は3.4cm。表面は撫で調整で内面には指頭状の調整圧痕が残っている。脚部には直径1.5cmの穿孔が外側から内側へ向けて、上列に4箇所、下列に4箇所開いている。4は小型の高環脚部である。表面は撫で調整で内面には指頭状の撫で調整圧痕が残っている。5~7は平底の底部片である。5の表裏は撫で調整され、底部内側に指頭状の圧痕を残している。底径4.2cm。6の表裏は撫で調整され、底部内側に斜めのヘラ削りの圧痕を残している。底径4cm。7は壺の底部である。表裏は撫で調整され、底部内側に指頭状の圧痕を残している。底径5.4cm。8は底径5.5cm。9は底径4cm。10は底径6.5cm。

11は扁平に仕上げた石器である。表面には研磨痕跡を残している。裏面は節理面での剥離をそのまま留める。石包丁であろうか。最大長9.1cm、最大幅2.4cm、厚さ0.35cm、重さ13.5gである。

6A号竪穴の時期は弥生後期前半期にあたる。



第48図 内無川4地区6A号竪穴実測図 (1/60)



第49図 内無川4地区6A号堅穴出土遺物実測図(1/4)

6B号堅穴(第50図)

この付近は長い調査区の中央部のやや南方に当たり、地形的には、北部や南部に比較して若干低い鞍部状の位置に相当する。L-2調査区とM-2調査区に跨る。遺構は隅丸方形プランの堅穴である。4号、5号、6A号堅穴が同じ位置にあり、ほぼ重複する関係である。従って、堅穴の検出において最後まで堅穴遺構を断定するのに躊躇した遺構である。6B堅穴と6A堅穴の炭化物位置、6B堅穴と5号堅穴の北西側プランは同じである。

堅穴の平面プランは、東西約6.4m、南北約6.2mを呈する。確認面から床面までは約1cm～5cmであり、中央部付近に長軸120cm、短軸110cm、床面からの深さが約5cm～6cmの垂な皿状の炉跡が位置している。炉跡内には炭化物と焼土粒が詰まっており、中央部には掌大から人頭大の川原礫が3個位置していた。堅穴の支柱穴は4隅に位置する4本と推察できる。その他、堅穴内には柱穴が多数あるが、この堅穴に伴うものかどうかは判然としない。堅穴炉跡の炭化物の放射性炭素の年代測定(AMS測定)結果は1990±40yrBPであった。炉から桃の核が検出されている。

出土遺物(第51図)

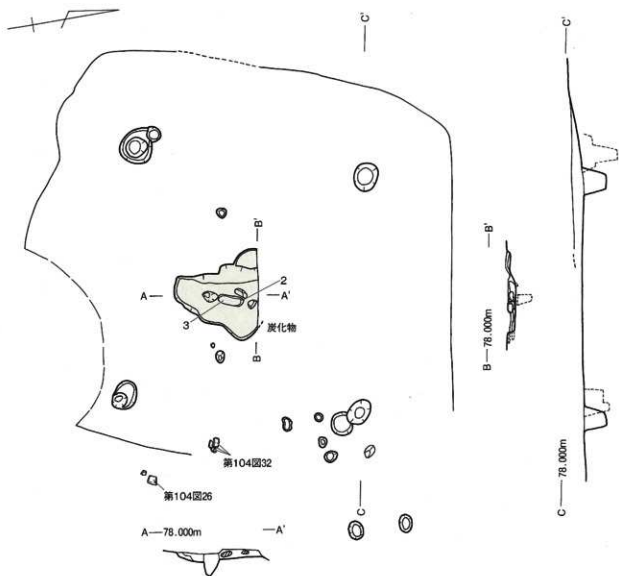
1、2は底部の破片である。1は高い上げ底で、底径6cm。2の平底は周縁が外に張り出すような円盤貼り付けの底部。底径5.5cmである。焼土や炭化物が混じった堅穴中央の炉の中から出土した。

3は方柱状を呈する川原礫を使用した砥石である。中央の面と両側面を研磨されている。一側面は緩やかにかなり窪んでおり、良く使い込まれていた。砂岩製で最大長41cm、最大幅13.8cm、厚さ9.9cm、重さ6kg。焼土や炭化物が混じった堅穴中央の炉の中から出土した。

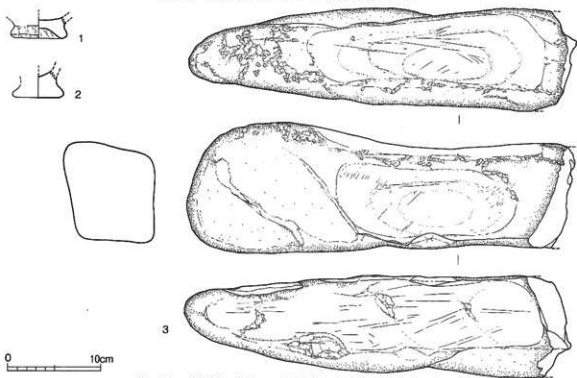
7号堅穴(第52図)

調査区の南端に位置する楕円形プランの堅穴である。7号堅穴は斜面部で検出された堅穴であり、南側の低い部分は削平を受けている。また、堅穴の北側を4号炭窯、東側を現代の用途不明の溝に切られる関係にある。

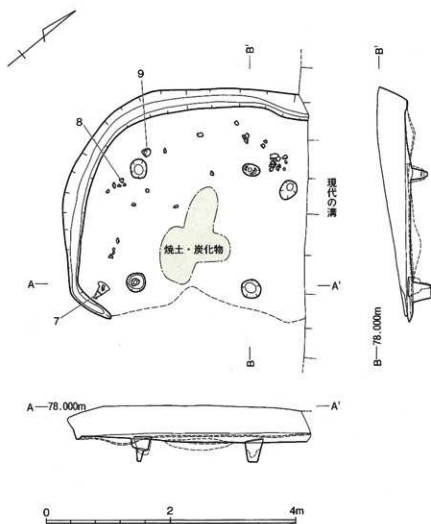
堅穴の平面プランは南北約4m、東西約3.9mを呈するが、東側を切られており、現況より約1m程度大きくないと推察できる。確認面から床面までは北側の深い所で約45cmであり、南側では削平されている。堅穴は4本支柱であり、北壁から西壁にかけては、幅15cmで深さ5cmの壁溝が廻っている。中央部付近に長軸1.6m、短軸50cmと長軸1.1m、短軸60cmの楕円状の焼土炉が位



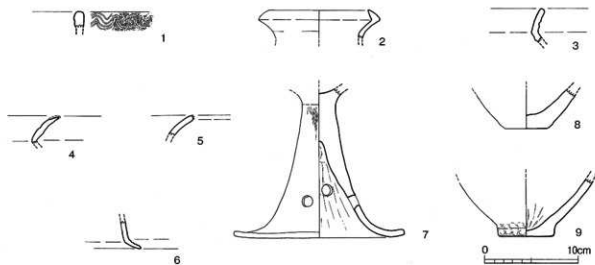
第50図 内無川4地区6B号竪穴実測図 (1/60)



第51図 内無川4地区6B号竪穴出土遺物実測図 (1/4)



第52図 内無川4地区7号竪穴実測図 (1/60)



第53図 内無川4地区7号竪穴出土遺物実測図 (1/4)

置している。竪穴の炉跡の炭化物の放射性炭素の年代測定（AMS測定）結果は 2020 ± 40 yrBPである。

7号竪穴の時期は弥生後期前半期にあたる。

出土遺物 (第53図)

1は壺形土器の複合口縁部である。口縁外面に一条の櫛描波状文を施す。2は袋状を呈する複合口縁部である。表面の文様はない。口縁径10.4cmである。3～5は甕形土器の口縁部である。

6、7は高坏の脚部である。7はラッパのように広がるもので、中央部で直径2cmの穿孔が複数開いている。脚の付け根部で3.5cm、最大径は18.2cmである。表面に刷毛目痕と撫で調整、内面は指頭痕跡を残す調整痕を残している。8は鉢型土器の平底部である。表裏撫で調整で表面に指頭痕跡が残る。底径5.6cmである。9は底径6cmである。

8号堅穴 (第54図)

調査区の南端に位置する楕円形プランの堅穴である。8号堅穴の東南側の低い部分は地形の傾斜による削平を受けている。また、堅穴の東南側は7号炭窯に切られる関係にある。

堅穴の平面プランは北南で約7.7m、東西は推定で約6.5m程度に復元できそうである。確認面から床面までは北側の深い所で約30cmであり、南側では削平されている。堅穴の支柱は明確ではないが、楕円状プランに沿った10本前後がこの堅穴に伴うものである。堅穴中央部から西寄りに、長さ50cm、短径40cm前後の焼土が3箇所位置していた。

堅穴内の覆土には多数の土器片が含まれていた。堅穴の炉跡の炭化物の放射性炭素の年代測定(AMS測定)結果は1000±30yrBPであった。7号炭窯の資料が混在していたのであろうか。

出土遺物 (第55図)

1は壺形土器の複合口縁部である。立ち上がりは低く一条の櫛描波状文様が廻っている。2は壺形土器の複合口縁部である。立ち上がりは低く器壁は厚い。素文である。口径14.3cmである。3は頸部から胴部に至る破片。頸部に一条の断面三角突帯が廻っている。頸部径は8.2cmである。4は壺形土器の頸部から肩部にかけての破片である。頸部径は9.6cmである。頸部から肩部にかけては、断面三角形の突帯が五条廻っている。また、五条目の突帯には勾玉状の浮文も付着している。表裏は撫で調整されている。5は壺形土器の口縁部である。口径17.3cmである。6は壺形土器の口縁部であるが、頸部に二箇所の穿孔が並んでいた。補修孔であろうか。7は口縁部の断面が「く」の字状になる鉢形土器。口径19.5cmである。8は赤色顔料が塗られた甕の口縁部。9は壺形土器の口縁部である。頸部が余り括れず、そのまま胴部に移りし胴張りなのかもしれない。口径18.2cm、頸部径14.8cm、胴部最大径16.1cm。表裏は撫で調整で内面には指頭状の圧痕が残る。10は口縁部からそのまま平底部に至る鉢形土器である。表裏撫で調整を施す。口径13.5cm、底径4cm、器高11cmである。11は小型高坏の脚破片である。脚部径2.6cm。12は高坏の脚部である。大きく開いた末端部の径は22.5cmである。

13は壺形土器の平底部の破片である。表裏撫で調整を施し、内面は斜めヘラ削りを施す。底径は6.6cmである。14は壺形土器の胴部～底部付近の破片である。表裏は撫で調整。15は胴部から底部の破片である。底径6.5cmで、表面は撫で調整、内面は一部に刷毛目痕跡を残す撫で調整。

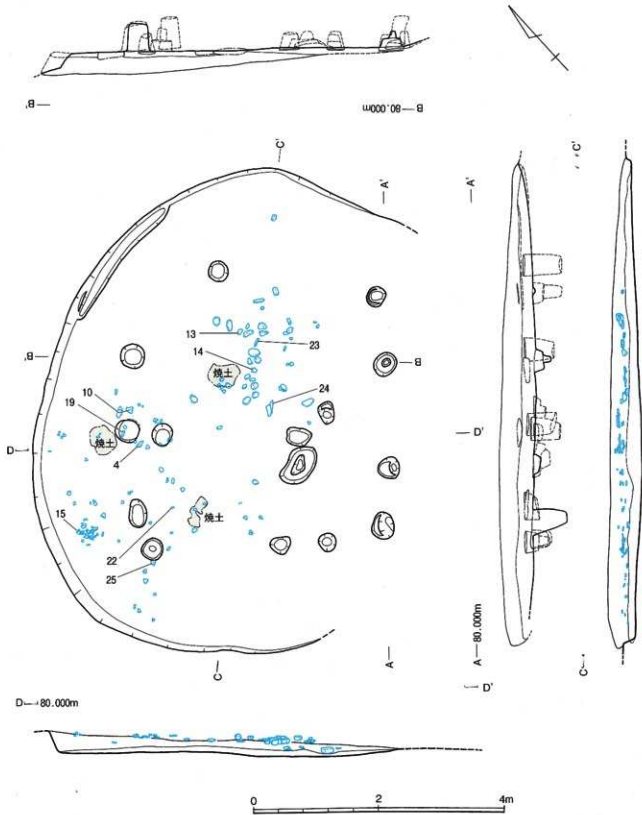
16～21は底部の破片である。16は底径4cm、17は丸底気味で底径4.5cm。18は平底径7cm。19～21は心持ち上げ底の平底である。19は上げ底気味で底径4.4cm。表面は刷毛目後に撫で調整、内面は撫で調整。20は底径5.2cm。21は甕の平底で底径3cmである。

22は鉄鏝の基部である。現存する最大長5.7cm、最大幅1.3cm、厚さ0.6cm、重さ8.7g。

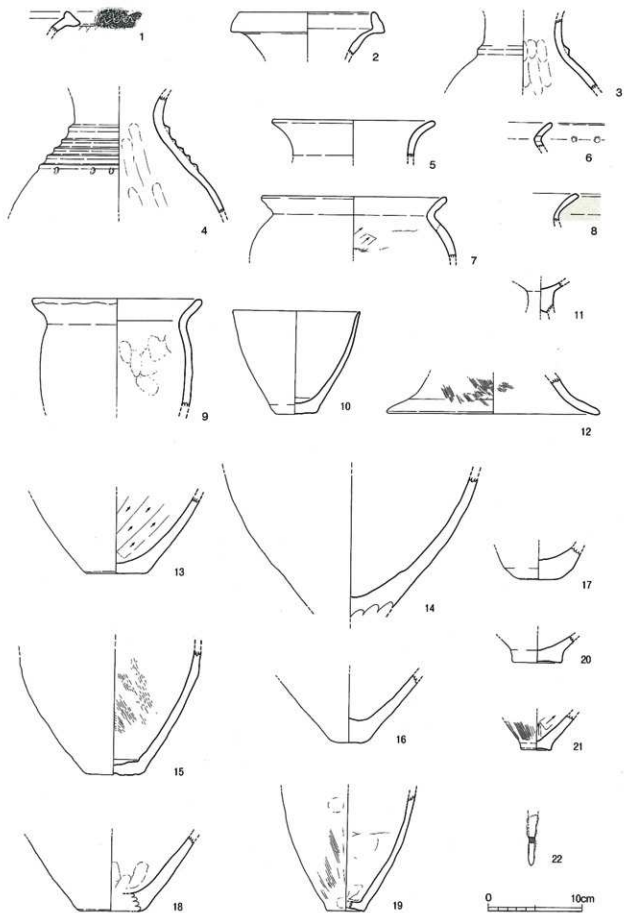
23、24は結晶片岩製の棒状の自然礫を加工した砥石である。23は2面の使用面を持つ。使用面は緩く窪み、擦り減っている。最大長24cm、最大幅5.8cm、厚さ2.5～4cm、重さ845.8g。24は3面の使用面を持つ。使用面は緩く窪み、擦り減っている。最大長21.7cm、最大幅4.8cm、厚さ3cm、重さ449.4g。

25は磨石・砥石である。拳状の円礫の平坦面に磨り痕跡と敲いた痕状の痕跡が残っている。円礫の周縁にも敲打痕跡が面的に残っている。石材はアブライト。最大長11cm、最大幅9.9cm、厚さ6cm、重さ895.5g。

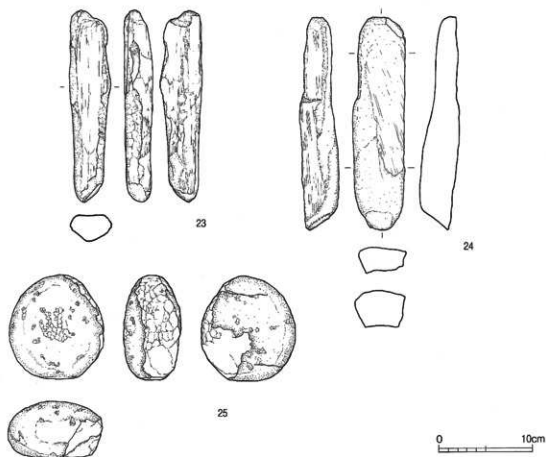
8号堅穴の時期は弥生後期前半期にあたる。



第54図 内無川4地区8号竪穴実測図 (1/60)



第55図 内無川4地区8号竪穴出土遺物実測図 (1/4)



第56図 内無川4地区8号竪穴出土遺物実測図(1/4)

9号竪穴(第57図)

調査区の南端の比較的高い場所に位置する楕円形プランの竪穴である。9号竪穴は大きく後世の削平を受けており、竪穴の平面プランも部分的に遺存する箇所から推測して想定したものである。竪穴の平面プランは南北で約6.7m、東西は推定で約5.2m程度に復元できそうである。確認面から床面までは北西部の一部で約10cmであり、全体的に遺存状態は良くない。竪穴の主柱は明確ではないが、楕円状プランに沿った10本前後がこの竪穴に伴うものである。竪穴中央部から北東寄りに、長径120cm、短径90cm前後の焼土が一箇所位置していた。また、竪穴の南東部では貼り床的な硬化面が長径約3.5m、短径約2m前後にあり、竪穴の一部の施設と把握している。竪穴内の北西部にある土坑内から赤色顔料を塗布した完形の鉢形土器が伏せた状態で出土した。

竪穴の炉跡の炭化物の放射性炭素の年代測定(AMS測定)結果は 1970 ± 30 yrBPである。また、土坑内の炭化物の放射性炭素の年代測定(AMS測定)結果は 2000 ± 40 yrBPである。

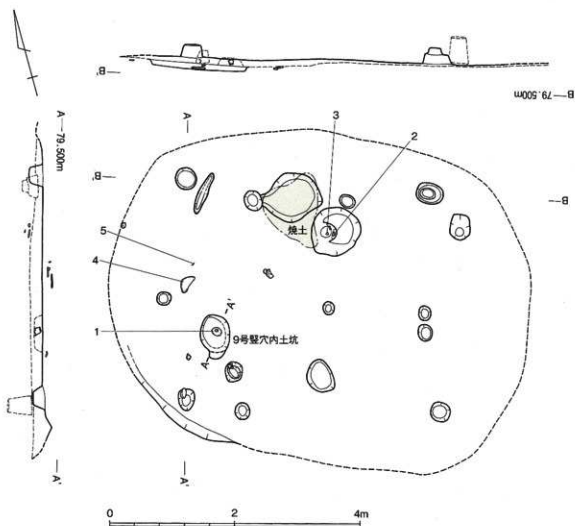
出土遺物(第58・59・60図)

1は9号竪穴内の土坑内から出土した赤色顔料を塗布した略完形の鉢形土器である。やや内湾気味な口縁部から緩い曲線を描きつつ平底部にいたる鉢形土器である。表裏ともに撫で調整され表面を赤彩する。口径14cm、胴部最大径14.7cm、底部径4.6cm、器高11.2cmである。

2は壺形土器の平底部の破片である。表面は刷毛目調整を施し、内面は粗い撫で調整を施す。底径は8.6cmである。3は分厚い平底部の破片である。表面は刷毛目調整を施し、内面は粗い撫で調整を施す。底径は6.1cmである。

4は結晶片岩製の石鎌である。最大長3.15cm、最大幅1.1cm、厚さ0.25cm、重さ1.3g。5は結晶片岩製の比較的水平な石皿である。表裏に使用面があり、擦過により楕円状に窪んでいる。最大長32.6cm、最大幅16.4cm、厚さ2.3~4.3cm、重さ2550g。

9号竪穴の時期は弥生後期前半期にあたる。



第57図 内無川4地区9号竪穴実測図 (1/60)

10号竪穴 (第61図)

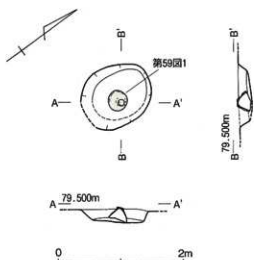
調査区の中央部のやや南方、K-3調査区とL-3調査区に位置する楕円状プランの竪穴である。この付近は長い調査区の中央部付近に当たり、地形的には、北部や南部に比較して若干低い鞍部状の位置に相当する。10号竪穴は3号竪穴に切られる関係にある。

竪穴の平面プランは、南北約6.1m、東西約7.7mの楕円状を呈する。確認面から床面までは約10～15cmであり、中央部付近に長軸75cm、短軸48cm、深さ約10cmの楕円状の炉跡が位置し焼土が遺存していた。竪穴のプランは楕円状を呈するが、西側では二重に検出されており、立て替えや増築を推量させる。竪穴には所々に壁溝が遺存している。壁溝は幅約10cmで深さは数センチである。竪穴内には柱穴が多数あるが、この竪穴に伴うものを弁別することは至難である。10号竪穴出土の土器片付着の炭化物の放射性炭素の年代測定 (AMS測定) 結果は2140±40yrBPである。

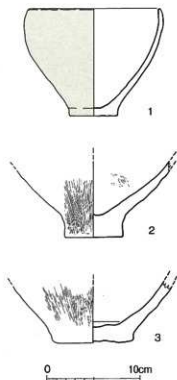
出土遺物 (第62図)

1は複合口縁部の破片である。外面に撗指波状文を一条施す。2～3は壘形土器の口縁部である。2の口径は18.2cm。3の口径は15.3cm。4は鉢形土器で、頸部径は17cm。

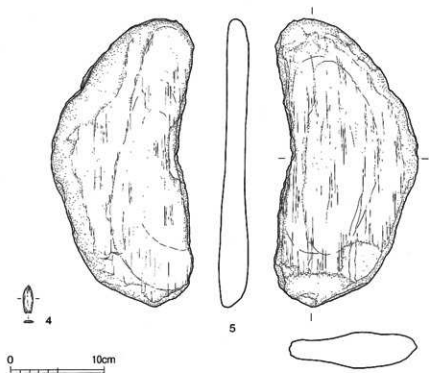
5～7は高坏の脚部である。5の脚径は5.3cmである。7の脚は直径1.1cmの穿孔が開いている。表裏撫で調整。脚径は5.5cmである。8は上げ底状の底部である。底部径は4.4cm。9は平底部である。底部径は6cm。



第58図 内無川4地区9号竪穴内土坑 (P-2) 実測図
(1/30)



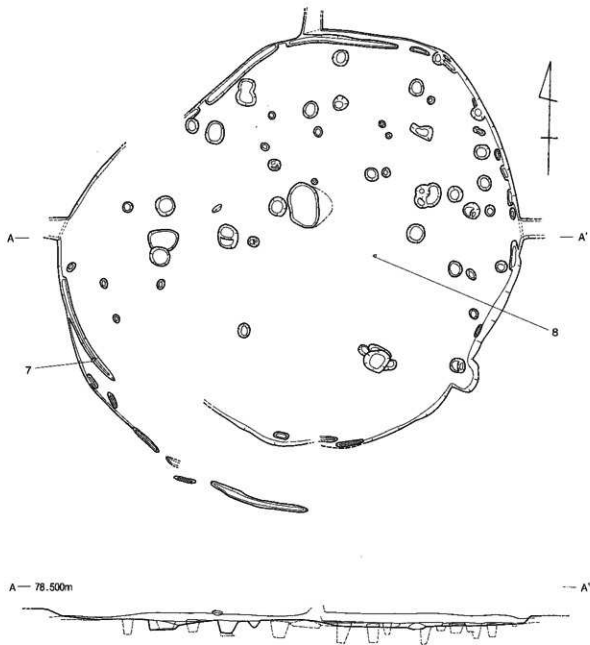
第59図 内無川4地区9号竪穴出土
遺物実測図 (1/4)



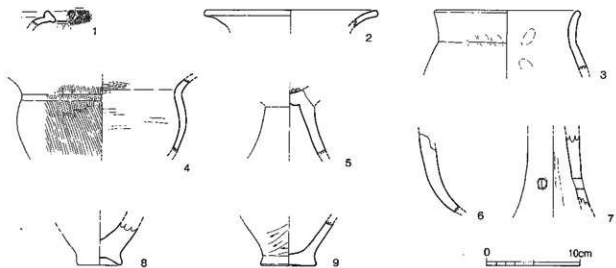
第60図 内無川4地区9号竪穴出土遺物実測図 (1/4)

11号竪穴 (第63図)

南北に長い調査区の北側のほぼ中央部、E-4調査区に位置する小型の竪穴である。1号小児用カメ棺墓の西側に位置している。10号土坑に切られる関係にある。竪穴の平面プランは、南北約3.2



第61図 内無川4地区10号竖穴実測図 (1/60)



第62図 内無川4地区10号竖穴出土物実測図 (1/4)

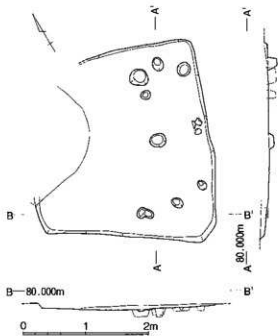
m、東西約2.9mのほぼ方形を呈する。確認面から床面までは約10cm~20cmである。竪穴内には柱穴状の遺構はあるが判然としない。出土遺物は殆ど無く、東壁中央部で川原礫が三つ遺存していた。

12号竪穴（2号土器集中部）（第64図）

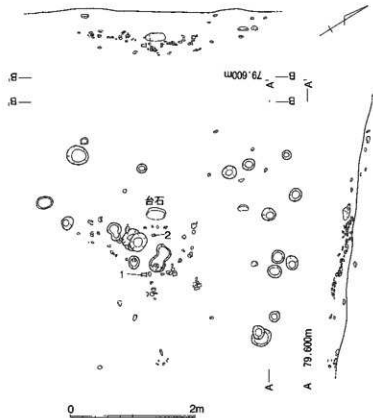
調査区北側のF-5調査区、1号土坑内土器集中部の西側斜面部に位置する土器集中部である。これに伴う遺構は確認されていない。土器の分布は南北で3m、東西で4mの範囲に広がっていた。土器は中央部に位置する一抱えもある白石を中心に分布しており、円形の竪穴状遺構の残映と把握できそうである。

出土遺物（第65図）

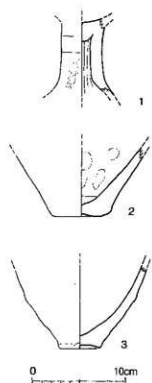
1は高坏の脚部である。表裏撫で調整。内部に絞り痕跡。脚径は4.3~4.5cmである。2、3は平底部である。2は表面撫で調整、内面は指頭調整痕跡を残す。底部径は6.4cmである。3は表裏撫で調整。上げ底気味な平底で径4.3cmである。



第63図 内無川4地区11号竪穴実測図（1/60）



第64図 内無川4地区12号竪穴実測図（1/60）



第65図 内無川4地区12号竪穴出土遺物実測図（1/4）

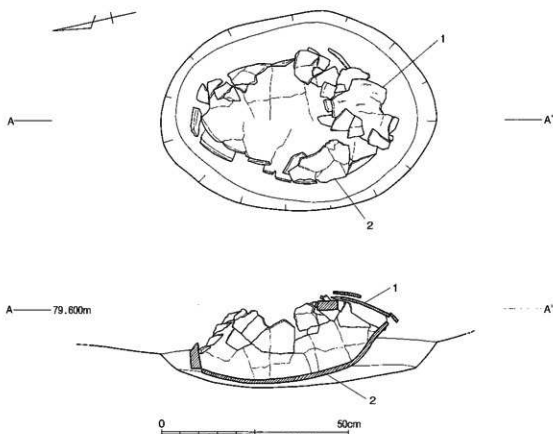
(2) 小児用カメ棺墓

1号カメ棺墓 (第66図)

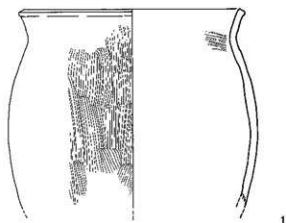
南北に長い調査区の北側のほぼ中央部、E-4調査区に位置する小児用カメ棺墓である。カメ棺墓の墓坑の平面プランは楕円形で長軸を南北にとるものである。墓坑の長径は73cm、短径は52cmで、確認面からの深さは約10cm~12cmであった。墓坑は浅い皿状を呈していた。カメ棺は長径55cm、短径は36cmで、確認面から土器下面までは22cmであった。口縁部を欠損した壺形土器が下棺、底部を欠損した甕形土器が上棺となり、いわゆる合わせ口の形態ではなく、下棺の壺形土器の上面を甕形土器で覆っていた状態と推察される。カメ棺は、検出時には上面を大きく削平された状態であった。

出土遺物 (第67図)

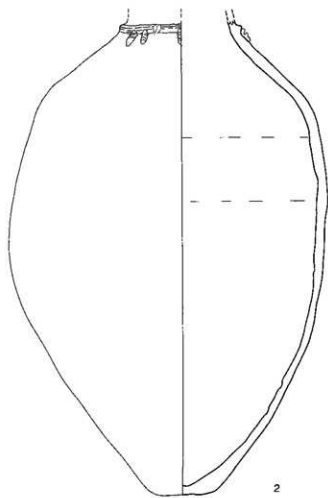
カメ棺は壺形土器と甕形土器でセットとなる。1は底部を欠損した甕形土器である。口縁部は僅かに外反し、頸部は殆ど奪まることなく胴部が僅かに膨らんでいた。表面は刷毛目調整で内面は撫で調整を施す。口縁部径23.8cm、頸部径22cm、胴部最大径26.4cm、現存器高21cm。2は口縁部~頸部を欠損した壺形土器である。頸部の一部には断面三角突帯が一条確認でき、突帯には刻目入りの縦長浮文が等間隔に付着している。底部はレンズ状の丸平底を呈する。表裏は撫で調整。頸部径11cm、胴部最大径33.4cm、底部径6cm、現存器高50.2cm。



第66図 内無川4地区1号カメ棺墓実測図 (1/10)



1



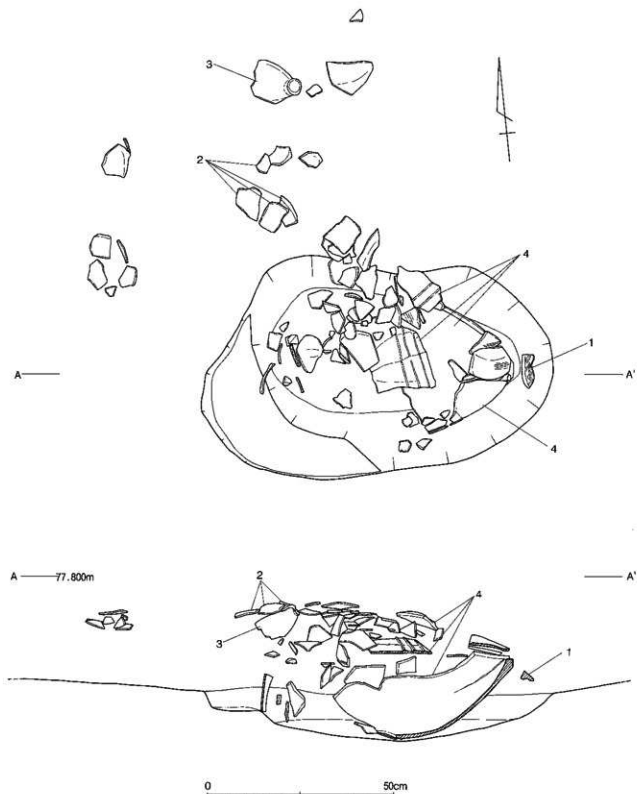
2



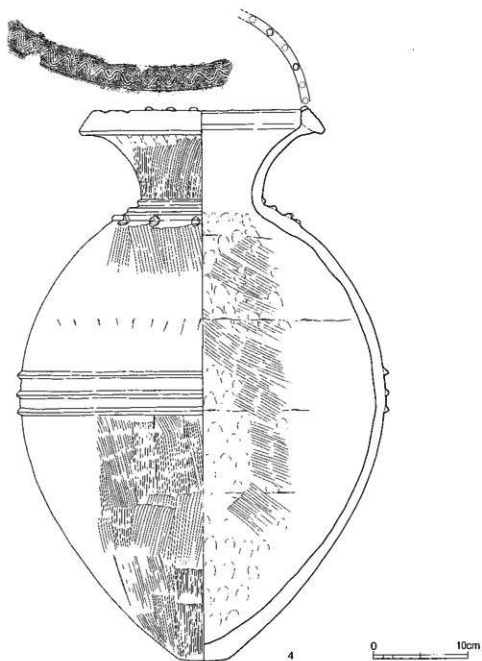
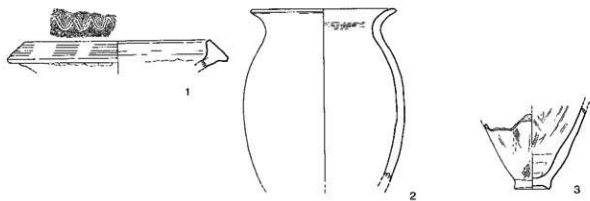
第67図 内無川4地区1号カメ棺土器実測図 (1/4)

2号カメ棺墓 (第68図)

南北に長い調査区の北側の中央部より東寄りのE-3調査区に位置する小児用カメ棺墓である。カメ棺墓の墓坑の平面プランは歪な楕円形で長軸を東西にとるものである。墓坑の長径は94.5cm、短径は53cm～59cmで、確認面からの深さは約11cmであった。墓坑は浅い皿状を呈していた。カ



第68図 内無川4地区2号カメ棺墓実測図 (1/10)



第69図 内無川4地区2号カメ棺土器実測図 (1/4)

メ棺は長径約73cm、短径約50cmで、確認面から土器下面までは33cmであった。複合口縁の壺形土器が下棺、甕形土器が上棺となり、いわゆる合わせ口の形態ではなく、下棺の壺形土器の口縁部～頸部を取り外した後、その上面を甕形土器で覆っていた状態と推察される。取り外された複合口縁片は、下棺の壺形土器の口部付近と底部付近に分けた状態で意図的に配置されていた。カメ棺は下棺の壺形土器の胴部下半が原位置を保っており、上半は土器が割れて散乱した状態であった。

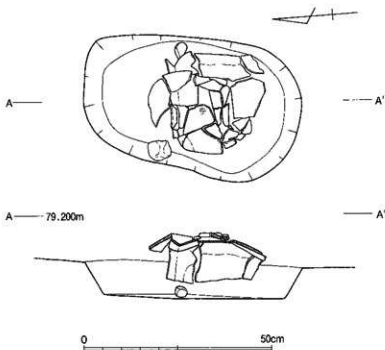
出土遺物 (第69図)

カメ棺は壺形土器と甕形土器でセットとなる。1は櫛描波状文を一条施文する複合口縁部の破片である。4と同一個体と考えられ、4の底部の付近に安置されていたものである。2は底部を欠損した甕形土器である。口縁部は大きく外反し、頸部は窄まり、胴部も僅かに膨らんでいる。表裏共に撫で調整を施す。口縁部径15.6cm、頸部径12.2cm、胴部最大径17cm、現存器高18.5cm。3は甕形土器の底部である。表裏の刷毛目調整は一部を除き撫で消されている。カメ棺の中心より約70cm離れた位置に遺存していた。

4は複合口縁部に櫛描波状文を一条施文する壺形土器である。口縁の立ち上がりは低く、口唇部には一定の間隔を空けて円形浮文が配置されている。頸部は大きく括れ、肩部へかけて三条の断面三角突帯文と刻目入りの縦長浮文が等間隔に付着している。胴部は球形に誇張され、胴部中央に三条の断面三角突帯文が施文されている。底部はレンズ状の丸平底を呈する。表裏は刷毛目調整で内面には指頭状の調整圧痕が残っている。口縁部径23cm、頸部径12.8cm、胴部最大径39cm、底部径5.6cm、器高58cm。

3号カメ棺墓 (第70図)

南北に長い調査区の北側の中央部よりのH-4調査区に位置する小児用カメ棺墓である。カメ棺墓の墓坑の平面プランは楕円形で長軸を南北にとるものである。墓坑の長径は59cm、短径は35cmで、確認面からの深さは約10cmであった。墓坑は浅い皿状を呈していた。カメ棺は長径約31cm、短径約26cmで、確認面から土器下面までは13cmであった。このカメ棺は下棺がなく、底部を欠損した甕形土器を半分にし、上棺として土器片で上部のみを覆った状態であったと推察される。

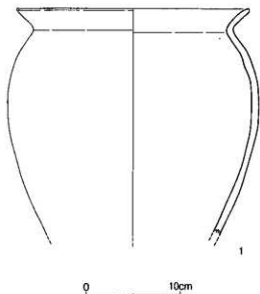


第70図 内無川4地区3号カメ棺墓実測図 (1/10)

形土器の口縁部付近には、左右に拳大より小さな川原礫が2個意図的に配置されていた。土器を打ち割った道具であろう。

出土遺物（第71図）

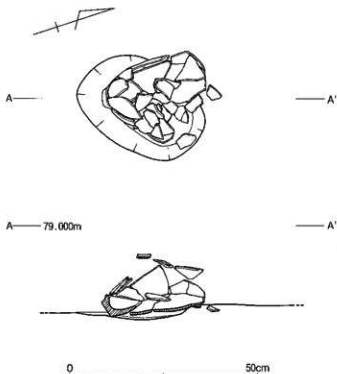
1は底部を欠損した甕形土器である。口縁部の断面は「く」の字を呈し、胴部上半に最大径がくるものである。表裏は撫で調整されている。口径24.6cm、頸部径21.3cm、胴部最大径26.7cm、現況の器高24cmである。



第71図 内無川4地区3号カメ棺土器実測図 (1/4)

4号カメ棺墓（第72図）

南北に長い調査区の中央部、心持ち低い鞍部付近、J-3調査区とJ-4調査区の境に位置する小児用カメ棺墓である。カメ棺墓の墓坑の平面プランは楕円形で長軸を東西にとるものである。墓坑の長径は33cm、短径は23cmで、確認面からの深さは約2cmであった。墓坑は浅い皿状を呈するが、その大半は後世の削平を受けたものと考えられる。カメ棺は長径約31cm、短径約25cmで、確認面から土器下面までは16cmであった。このカメ棺は下棺であり、口縁部～肩部を欠損した甕形土器を主体としている。



第72図 内無川4地区4号カメ棺墓実測図 (1/10)

出土遺物 (第73図)

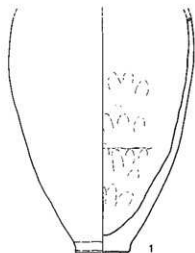
1は口縁部～頸部を欠損した甕形土器である。胴部上半に最大径がくるが胴の張りは少なく、平底である。表裏は撫で調整され、内面に指頭状の痕跡が残っていた。胴部最大径19.7cm、底部径5.6cm、現況の器高24.5cmである。

5号カメ棺墓 (第74図)

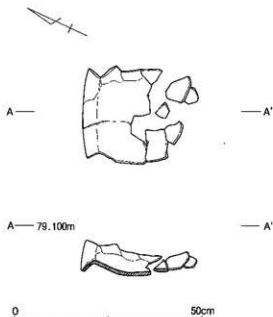
南北に長い調査区の北東端、D-3調査区に位置する小児用カメ棺墓である。カメ棺墓の墓坑の平面プランは判然としないが、遺存するカメ棺から想定して、略楕円形で長軸を南北にとるものである。墓坑の長径は約50cm、短径は約40cm程度であった。カメ棺は長径約31cm、短径約25cmで、確認面から土器下面までは8cmであった。このカメ棺は下棺であり、大半は後世の削平を受けたものと考えられる。

出土遺物 (第75図)

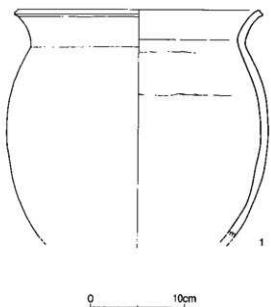
1は胴部下半～底部を欠損した甕形土器である。緩く外反する口縁部で、頸部が少し拵れ、胴部上半に最大径がくる。表裏は撫で調整され、口縁付近と内面に指頭状の痕跡が残っていた。口径25.6cm、頸部径22.8cm、胴部最大径27.8cm、現況の器高24cmである。



第73図 内無川4地区4号カメ棺土器
実測図 (1/4)



第74図 内無川4地区5号カメ棺墓実測図 (1/10)



第75図 内無川4地区5号カメ棺土器実測図 (1/4)

(3) 土坑状遺構

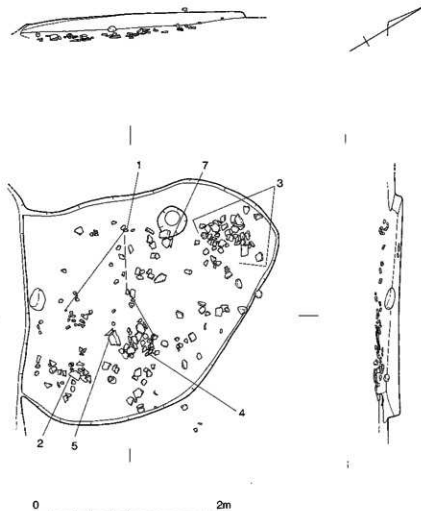
1号土坑（1号土器集中部）（第76図）

南北に長い調査区の北側の中央部に位置する土坑である。土坑の平面プランは歪な楕円形に似た不定形で、長軸を南北にとるものである。土坑の長径は3.2m、短径は2.3～2.5mで、確認面からの深さは約10～20cmであった。土坑内には夥しい数量の土器片が幾つかのブロック状に集中していた。土器は床面より15cm程度浮いた状態であった。土坑内には一本の柱穴らしい跡があったのみである。

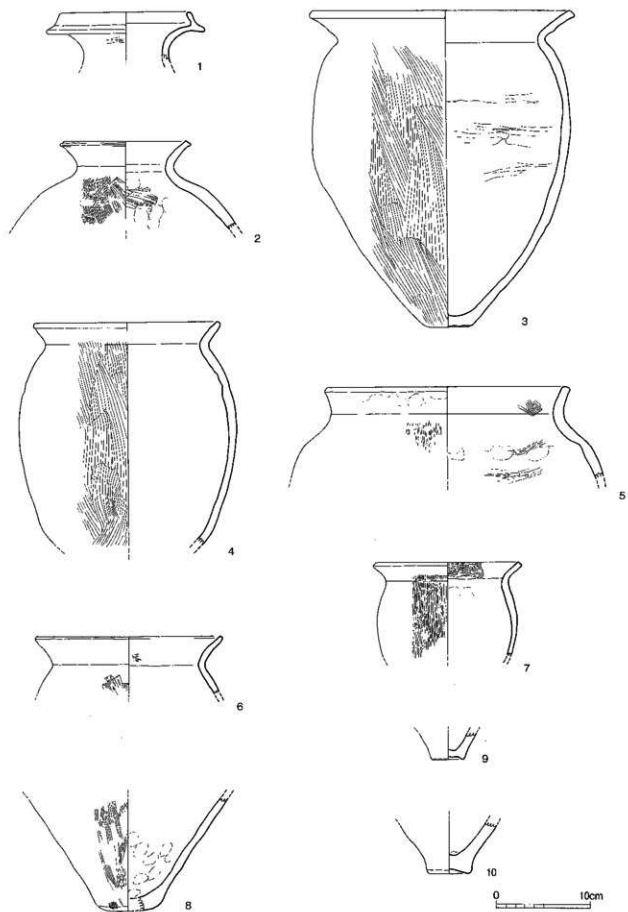
出土遺物（第77図）

1は複合口縁部の破片である。口縁の立ち上がりは低く、撈描波状文も無い。表裏は撫で調整。口径14cm、口縁最大径17cm、頸部9cmである。2は壺形土器の口縁部である。口縁は外反し、頸部で締め球形の胴部へ至る。口唇は凹線気味に撫で調整されている。表裏刷毛目調整で内面に指頭状の押しえ痕跡を残す。口径14cm、頸部径10.3cm、胴部径は、24cm以上はある。

3～7は壺形土器である。3は外傾する広い口縁から直角に折れ曲がって、張りのない胴部にいたる平底の甕である。表面は刷毛目調整、内面はヘラ状工具での横撫で調整を施す。口径27.3cm、頸部径22cm、胴部最大径27.5cm、底径4.7cm、器高33.5cm。4は外傾する口縁から直角に折れ曲がって、やや張る胴部にいたる甕である。胴部下半から底部は欠損している。表面は刷毛目調整、内面は横撫で調整を施す。口径19.5cm、頸部径17.3cm、胴部最大径23cm、現況での器高24cmで



第76図 内無川4地区1号土坑実測図 (1/40)

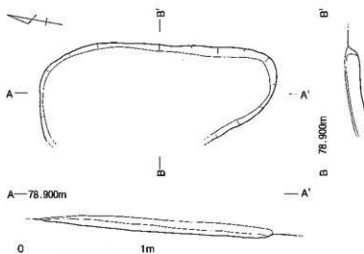


第77图 内無川4地区1号土坑出土遺物実測図(1/4)

ある。5は短い立ち上りの口縁部から胴部誇張した形の甕である。表裏刷毛目調整で内面に指頭状の押さえ痕跡を残す。口径26.2cm、頸部径24.8cm、胴部径は33.5cm以上ある。6は表裏に刷毛目の痕跡を若干残すもので、口径20cm、頸部径16cmである。7は表裏刷毛目調整を施し、口径15.7cm、頸部径13cm、胴部径14.8cmである。底部は欠損している。8～10は底部の破片である。8は壺形土器の底部である。表面は刷毛目調整、内面は横撫で調整を施す。丸底気味の平底で底径6cmを測る。9、10は壺形土器の上げ底気味な平底である。表裏撫で調整。9は底径3.3cm、10は底径4.3cmである。

2号土坑 (第78図)

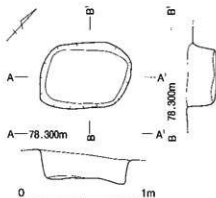
南北に長い調査区の鞍部に相当する中央部、2号炭ガマ遺構の東側に位置する土坑である。土坑の平面プランは歪な長楕円形に似た形で、長軸を南北にとるものである。土坑の長径は1.87m、短径は推測で約90cm、確認面からの深さは約10cmであった。床面は、北から南への自然地形の傾斜に沿って約4度の傾斜が確認できる。土坑内には土器片等の遺物はなかった。用途・機能は判らない。



第78図 内無川4地区2号土坑実測図 (1/30)

3号土坑 (第79図)

南北に長い調査区の北端の縁辺中央部に位置する土坑である。土坑の平面プランは歪な楕円形で、長軸を東西にとるものである。土坑の長径は73cm、短径は53cm、確認面からの深さは約20cmであった。床面は、西から東への自然地形の傾斜に沿う様子であるが、ほぼ平坦に近い形成である。土坑内には土器片等の遺物はなかった。用途・機能は判らない。



第79図 内無川4地区3号土坑実測図 (1/30)

4号土坑 (第80図)

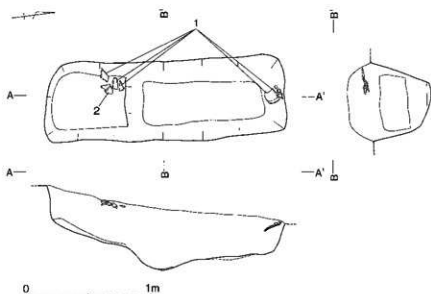
調査区の北端の縁辺中央部、5号土坑の東側に位置する土坑である。土坑の平面プランは隅丸長方形で、長軸を南北にとるものである。土坑の長径は190cm、短径は62cm、確認面からの深さは約30～45cmであった。床面は、南から北への自然地形の傾斜に沿う様子であるが、長軸の中央部ではやや深くなり、ほぼ平坦面を意図した様相を呈する。

土坑の覆土上部には土器片が2箇所で確認できた。土坑内の土器片は、土坑の北端に2点の土器片と2点の川原小礫、南端から約40cm内側寄りに5点の土器片が各々まとめて検出できることから、土器は意図的に配置された状態と確認できた。土器は弥生後期の複合口縁部の破片と弥生中期の高坏の坏部の破片である。後期の複合口縁部の破片は小さいものである。一方、高坏の坏部は破損しており、北端の2点と、南端の3点の5点が相互に接合し、ほぼ坏部は完全に接合できた。弥生中期の土坑墓の頸部付近と足元付近に土器片を意図的に配置する例は普遍的に確認できる

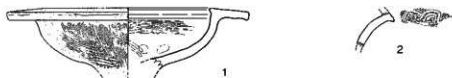
ことから、当土坑はこのような在り方に類似しており、複合口縁部の破片から考えて、弥生後期の土坑墓と解釈できそうである。

出土土器（第81図）

1は高坏の坏部の破片である。脚部を欠損している。口縁部は鋤先状を呈する。口縁幅は4.3cmでやや垂れ気味。表面は縦刷毛目、内面横刷毛目後撫で調整。表面に赤色顔料を塗布している。口径17.2cm、口縁最大径26cm、坏部の最大深さは6cm。2は弥生後期の複合口縁部の破片である。口唇部は欠損しているが、口縁外側に櫛指波状文が一条施文されている。



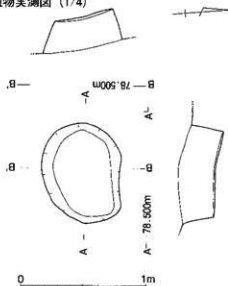
第80図 内無川4地区4号土坑実測図 (1/30)



第81図 内無川4地区4号土坑出土遺物実測図 (1/4)

5号土坑（第82図）

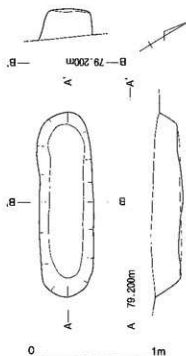
調査区の北端の縁辺中央部、4号土坑の西側に位置する土坑である。上坑の平面プランは歪な楕円形で、長軸を東西にとるものである。土坑の長径は80cm、短径は63cm、確認面からの深さは約25cmであった。床面は、南から北への自然地形の傾斜に沿う様子であるが、長軸はほぼ平坦に近い様相を呈する。土坑内には土器片等の遺物はなかった。用途・機能は判らない。



第82図 内無川4地区5号土坑実測図 (1/30)

6号土坑 (第83図)

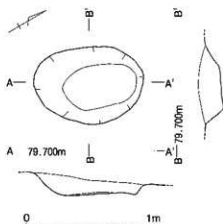
調査区の北端の縁東端、9号土坑の西側に位置する土坑である。土坑の平面プランは長楕円形で、おおよそ長軸を東西にとるものである。土坑の長径は146cm、短径は44cm、確認面からの深さは約20cmであった。床面は、ほぼ平坦に近い様相を呈する。土坑内には土器片等の遺物はなかった。用途・機能は判らない。



第83図 内無川4地区6号土坑実測図 (1/30)

7号土坑 (第84図)

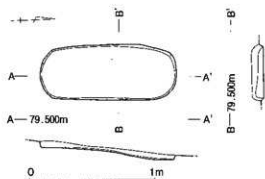
調査区の北側の中央部、1号カメ棺墓の東側に位置する土坑である。土坑の平面プランは楕円形で、長軸を南北にとるものである。土坑の長径は88cm、短径は62cm、確認面からの深さは約10～15cmであった。床面は、ほぼ平坦に近い様相を呈する。土坑内には土器片等の遺物はなかった。用途・機能は判らないが、1号カメ棺墓と同じような出土状態を呈しており小児用の土坑墓の可能性もある。



第84図 内無川4地区7号土坑実測図 (1/30)

8号土坑 (第85図)

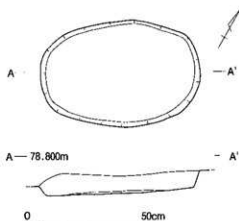
調査区の北側の中央部に位置する土坑である。土坑の平面プランは長楕円形で、長軸を南北にとるものである。土坑の長径は108cm、短径は45cm、確認面からの深さは約5cmであった。床面は、南から北への自然地形の傾斜に沿う様子であるが、長軸はほぼ平坦に近い様相を呈する。土坑内には土器片等の遺物はなかった。用途・機能は判らない。



第85図 内無川4地区8号土坑実測図 (1/30)

9号土坑 (第86図)

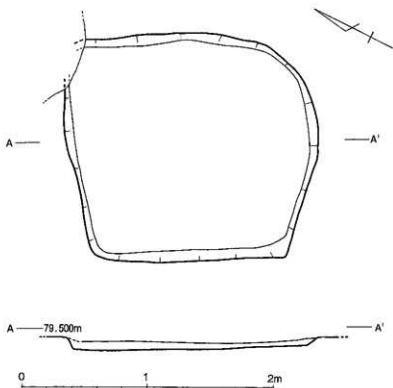
調査区の鞍部に相当する中央部、2号炭ガマ遺構の西側に位置する土坑である。土坑の平面プランは楕円形で、長軸を東西にとるものである。土坑の長径は1.28m、短径は84cm、確認面からの深さは約7~15cmであった。床面は平坦である。土坑内には土器片等の遺物はなかった。用途・機能は判らない。



第86図 内無川4地区9号土坑実測図 (1/30)

10号土坑 (第87図)

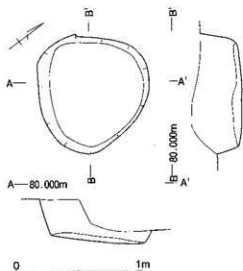
調査区の北側の中央部に位置する土坑である。12号堅穴を切る関係にある。土坑の平面プランは歪な隅丸方形で、長軸を南北にとるものである。土坑の長径は200cm、短径は180cm、確認面からの深さは約15cmであった。床面は、ほぼ平坦に近い様相を呈する。土坑内には土器片等の遺物はなかった。用途・機能は判らない。



第87図 内無川4地区10号土坑実測図 (1/30)

11号土坑（第88図）

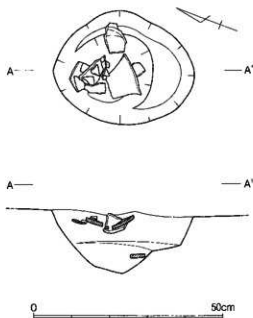
調査区南端部の西端にある2号堅穴内の覆土内で検出された土坑である。土坑の平面プランは歪な円形で、長軸を南北にとるものである。土坑の長径は180cm、短径は190cm、確認面からの深さは約45cmであった。2号堅穴床面より約20cm深い。土坑の床面は、ほぼ平坦に近い様相を呈する。土坑内覆土には微細な炭化物が混じり、土坑覆土上面の端には焼土が確認できた。土器片等の遺物はなかった。用途・機能は判らない。



第88図 内無川4地区11号土坑実測図 (1/30)

12号土坑（第89図）

調査区の南端の中央部に位置する二段掘りの土坑である。8号堅穴と切り合い関係にある。土坑の平面プランは歪な楕円形で、長軸を南北にとるものである。二段掘りの土坑である。外側土坑の長径は37cm、短径は30cm、確認面から底部までの深さは約16cmであった。土坑内には土器片等の遺物が少量出土しているが、図示するようなものはなかった。



第89図 内無川4地区12号土坑実測図 (1/10)

(4) 集石遺構

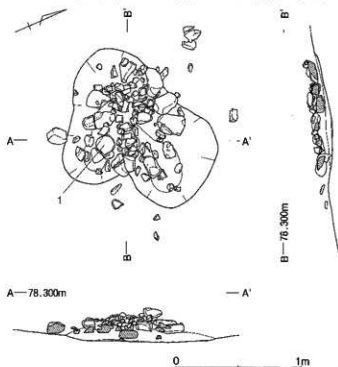
1号集石遺構 (第90図)

南北に長い調査区の中央部、心持ち低い鞍部付近のK-3調査区に位置する集石遺構である。集石は浅い皿状土坑内に拳大～掌大の川原礫を集めたもので、平面プランは歪な楕円形や歪な円形状である。皿状土坑の長径は1.3m、短径は最大で1.1mである。確認面から土坑底部の深さは約5cm～6cmであった。土坑は5層の灰褐色の凝灰岩風化土層を基底部としていた。

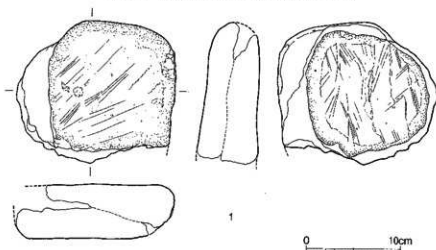
集石は20cm前後の比較的大きな石を円形に花卉形に配置し、その上に拳大の礫を集めたものである。集石は殆ど全てが赤褐色を呈しており、加熱を受けた様相であった。加熱された礫は割れており、相互に接合できるものもある。時代は判らないが縄文早期の集石炉に酷似している。石器以外の出土遺物は皆無である。

出土遺物 (第91図)

1は長径17cm、短径15cm、厚さ5.6cm、重さ2kgの川原礫である。表裏は磨耗しており本来石皿として使用されていたことが判る。礫は二つに割れていたが接合できた。



第90図 内無川4地区1号集石実測図 (1/30)



第91図 内無川4地区1号集石出土遺物実測図 (1/4)

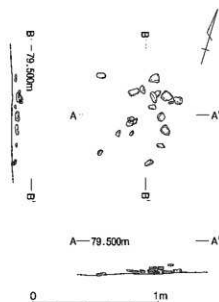
2号集石遺構 (第92図)

南北に長い調査区の中央部、心持ち低い鞍部付近のK-4調査区に位置する集石遺構である。

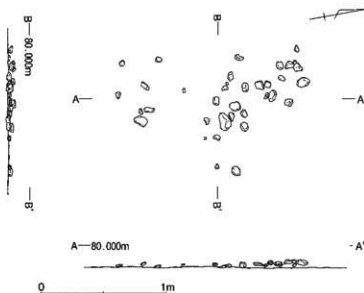
集石は約80cmの円形に、拳大かそれ以下の小さな川原礫を20個前後集めたもので、石の下には皿状の土坑はない。石は赤褐色に変色しており、加熱を受けたものであろう。5層の灰褐色の凝灰岩風化土層を基底部としていた。出土遺物は皆無である。

3号集石遺構 (第93図)

南北に長い調査区の北方、心持ち高いF-4調査区に位置する集石遺構である。集石は長径約1.6m、短径約1mの範囲に、拳大かそれ以下の小さな川原礫を40個弱集めたもので、集石の下には皿状の土坑はない。石は赤褐色に変色しており、加熱を受けたものであろう。5層の灰褐色の凝灰岩風化土層を基底部としていた。出土遺物は皆無である。



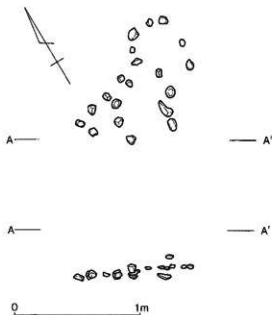
第92図 内無川4地区2号集石実測図 (1/30)



第93図 内無川4地区3号集石実測図 (1/30)

4号集石遺構 (第94図)

南北に長い調査区の北方の西端、G-5調査区に位置している。集石は長径約1.2m、短径約0.7mの範囲に、拳大かそれ以下の小さな川原礫を20個程度集めたもので、集石の下には皿状の土坑はない。石は赤褐色に変色しており、加熱を受けたものであろう。5層の灰褐色の凝灰岩風化土層を基底部としている。地形に沿って西側に傾斜している。出土遺物は皆無である。

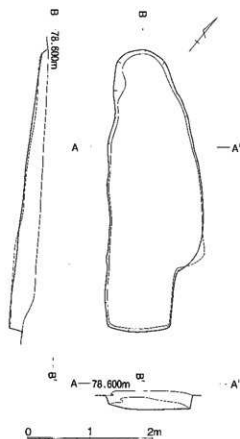


第94図 内無川4地区4号集石実測図 (1/30)

(5) 炭窯

1号炭窯 (第95図)

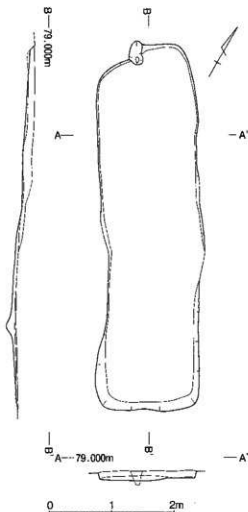
南北に長い調査区の中央部、心持ち低い鞍部付近のI-3調査区に位置する炭窯である。炭窯の平面プランは長楕円形や隅丸長方形とも呼べるもので、長軸を南北にとるものである。窯の長径は4.5m、短径は最大で1.5mである。一部にオーバーハングする所もあり窯の様相が推察できる。確認面からの深さは北側で約10cm、南側で約35cmであった。炭窯の長軸に沿った床面の南から北への傾斜角は約6~7度である。窯内の覆土は炭化物が粒子化しており覆土表面が黒っぽい色調を呈する。窯の床面近くでは、炭化物や焼土の混じった箇所もある。出土遺物は皆無である。覆土内の木炭の放射性炭素の年代測定(AMS測定)結果は 900 ± 30 yrBPである。



第95図 内無川4地区1号炭窯実測図 (1/60)

2号炭窯 (第96図)

1号炭窯の北側、I-3とI-4調査区とに位置する炭窯である。窯の平面プランは長丸長方形であり、長軸を南北にとるものである。窯の長径は5.8m、短径は最大で1.57~1.65mである。確認面からの深さは北側で約10~15cm、南側で約5cm前後であった。炭窯の長軸に沿った床面の南から北への傾斜角は約4~5度である。窯内の覆土は炭化物が粒子化しており覆土表面が黒っぽい色調を呈する。窯の床面近くでは、炭化物や焼土の混じった箇所もある。出土遺物は皆無である。

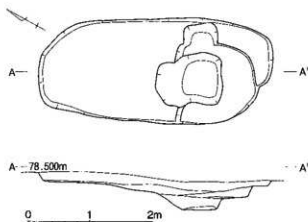


第96図 内無川4地区2号炭窯実測図 (1/60)

3号炭窯 (第97図)

南北に長い調査区の中央部、心持ち低い稜部付近のJ-3調査区に位置する炭窯である。炭窯の平面プランは長楕円形で、長軸を南北にとるものである。窯の長径は3.7m、短径は最大で1.7mである。確認面からの深さは北側で約10cm~20cmであった。炭窯の長軸に沿った床面は北から南へ幾分傾斜している様子である。窯内の覆土は炭化物が粒子化しており覆土表面が黒っぽい色調を呈する。窯の床面は、南側中央部で深く窪んだ状態であった。出土遺物は皆無である。

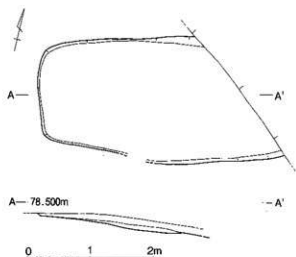
覆土内の炭化物の放射性炭素の年代測定(AMS測定)結果は 870 ± 40 yrBPである。



第97図 内無川4地区3号炭窯実測図 (1/60)

4号炭窯（第98図）

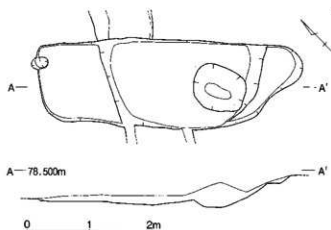
南北に長い調査区の南端部、P-1調査区に位置する炭窯である。7号堅穴を切る関係にある。炭窯の平面プランは隅丸長方形で、長軸を東西にとるものである。窯の東側は後世の溝で切られて不明である。窯の長径は3.9m+ α 、短径は最大で2mである。確認面からの深さは10cm~20cmであった。炭窯の長軸に沿った床面は西から東へ傾斜している。窯内の覆土は炭化物が粒子化しており覆土表面が黒っぽい色調を呈する。出土遺物は皆無である。



第98図 内無川4地区4号炭窯実測図 (1/60)

5号炭窯（第99図）

南北に長い調査区中央の鞍部、J-2調査区に位置する炭窯である。窯の中央部を後世の溝状攪乱で欠損している。炭窯の平面プランは歪な隅丸長方形で、長軸を東西にとるものである。窯の長径は4.25m、短径は最大で1.45mである。確認面からの深さは10cm~20cmであった。炭窯の長軸に沿った床面はほぼ平坦面であるが、東側中央部で若干窪んだ状態であった。窯内の覆土は炭化物が粒子化しており覆土表面が黒っぽい色調を呈する。出土遺物は皆無である。



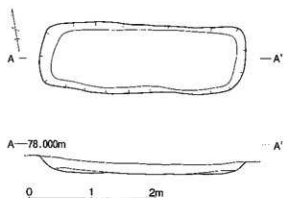
第99図 内無川4地区5号炭窯実測図 (1/60)

覆土内の炭化物の放射性炭素の年代測定（AMS測定）結果は 880 ± 30 yrBPである。

6号炭窯（第100図）

調査区の中央部よりやや南、L-2調査区に位置し、5号堅穴の中に遺存しておりこれを切る関係にある。この付近は長い調査区の中央部付近に当たり、地形的には、北部や南部に比較して若干低い鞍部状の位置に相当する。

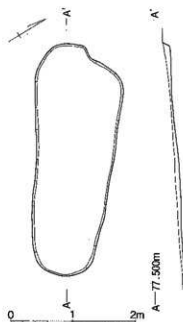
炭窯の平面プランは隅丸長方形で、長軸を東西にとるものである。窯の長径は3.3m、短径は最大で1.13mである。確認面からの深さは20cm~40cmであった。炭窯の長軸に沿った床面はほぼ平坦面であり断面は舟底状である。窯内の覆土は炭化物が粒子化しており覆土表面が黒っぽい色調を呈する。出土遺物は皆無である。覆土内の炭化物の放射性炭素の年代測定（AMS測定）結果は 1190 ± 30 yrBPである。



第100図 内無川4地区6号炭窯実測図 (1/60)

7号炭窯 (第101図)

調査区の南端、Q-2調査区に位置し、8号竪穴を切る関係にある。炭窯の平面プランは歪な長楕円形で、長軸を東西にとるものである。窯の長径は3.65m、短径は最大で1.4mである。確認面からの深さは10cm~20cmであった。炭窯の長軸に沿った床面は、地形の傾斜に対応して西から東へ傾斜しており、その傾斜角度は約3度である。窯内の覆土は炭化物が粒子化しており覆土表面が黒っぽい色調を呈する。出土遺物は皆無である。覆土内の炭化物の放射性炭素の年代測定 (AMS測定) 結果は $900 \pm 30\text{yrBP}$ である。



第101図 内無川4地区7号炭窯
実測図 (1/60)

(6) 各調査区出土の遺物 (第102・103・104・105・106・107・108図)

1~5は複合口縁部の壺形土器である。複合部は内湾気味に低く立ち上がる特徴を持つ。1の袋状を呈する内湾口縁外側には、山形文の内側に斜細線を刻んだ連続文が廻る。口縁内側は指圧調整痕が残っている。口径は16.6cm、口縁最大径は20.4cm、複合部の高さは2.3cmである。2、3の内湾口縁外側には一条の櫛描波状文が廻る。2の口径は16.3cm、口縁最大径は18.5cm、複合部の高さは1.5cmである。3の口径は17cm、口縁最大径は20.8cm、複合部の高さは2.6cmである。4の内湾気味な口縁部は、直立気味に立ち上がる。口縁外側には二条の櫛描波状文が廻る。口径は19.6cm、口縁最大径は21.1cm、複合部の高さは3.4cmである。5の複合部は素文である。表裏撫で調整で指頭圧痕を残す。口径は16.1cm、口縁最大径は19cm、複合部の高さは1.5cmである。

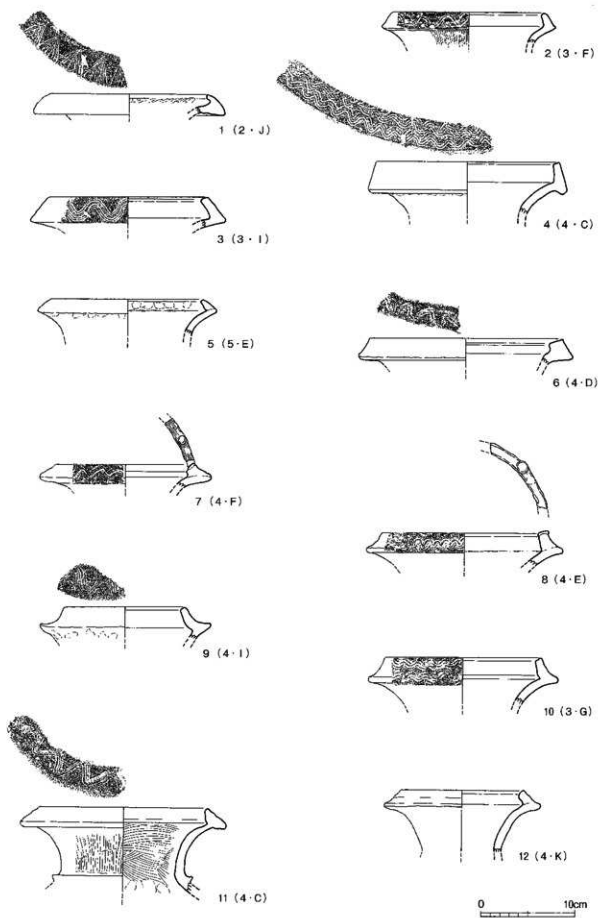
6~14は複合口縁部の壺形土器である。複合部は外反気味に低く立ち上がる特徴を持つ。6~8は低く立ち上がり口唇部は厚い。口縁外側には一条の櫛描波状文が廻る。6の口径は20.8cm、口縁最大径は22.8cm、複合部の高さは2.4cm。7、8の口唇部には凹形浮文を配置し、7の口径は15cm、口縁最大径は18.3cm、複合部の高さは2cm。8の口径は17.6cm、口縁最大径は20.8cm、複合部の高さは2cm。

9の口縁外側には一条の櫛描波状文が廻る。口径は12.7cm、口縁最大径は18cm、複合部の高さは2.2cm。10の口縁外側には二条の櫛描波状文が廻る。口径は16.7cm、口縁最大径は20cm、複合部の高さは2.6cm。11の複合部は器壁分厚く、口縁端は細く尖る。口縁外側には一条の櫛描波状文が廻る。口径は17.8cm、口縁最大径は22cm、複合部の高さは2.1cm。頸部径は13cmを測り、一条の断面三角突帯が廻る。表裏刷毛目調整。

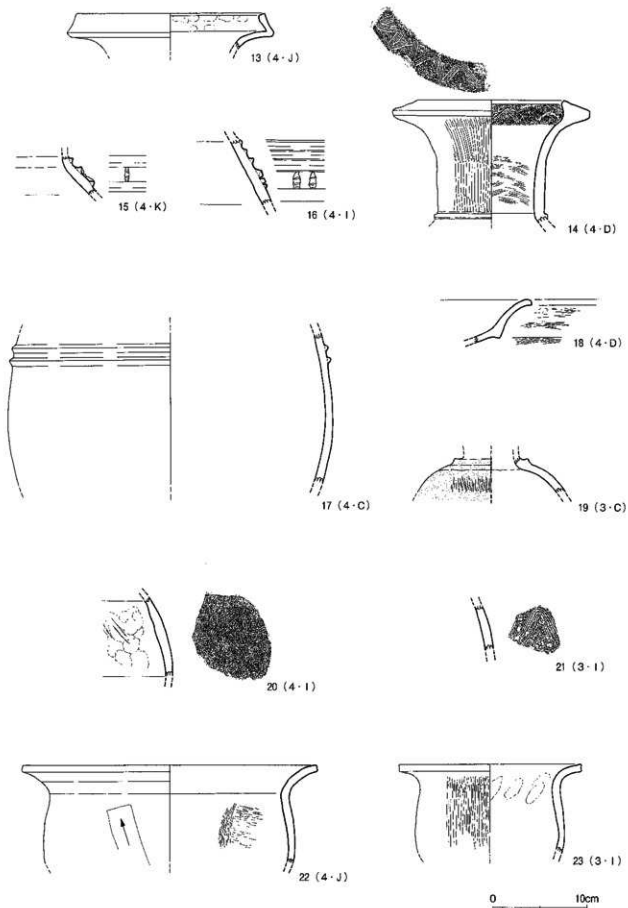
12、13の複合部は素文である。表裏撫で調整で、13は内面指頭圧痕を残す。12は口径12.9cm、口縁最大径は16.6cm、複合部の高さは1.7cmを測る。13は口径19.6cm、口縁最大径は21.7cm、複合部の高さは2.5cmである。

14は複合口縁部の壺形土器である。複合部は低く立ち上がる特徴を持つ。袋状を呈する内湾口縁外側には、一条の櫛描波状文が廻る。口縁内側にも一条の櫛描波状文が施された特異なものである。口径は14.5cm、口縁最大径は21cm、複合部の高さは1.6cmである。頸部は長く、口唇~頸部突帯間は11cm、頸部径は10.5cmを測り、一条の低い断面三角突帯が廻る。表裏刷毛目調整。

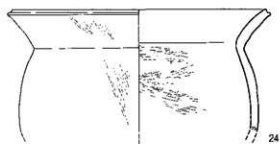
15、16は壺形土器の頸部から胴部へ至る破片である。15は三条の断面三角突帯文が廻り、二条と三条の間は、短い縦の飾り突帯文でつなぐ。16は四条の断面三角突帯文が廻り、短い縦の飾り突帯



第102図 内無川4地区調査区出土遺物実測図1 (1/4) ()内は調査区



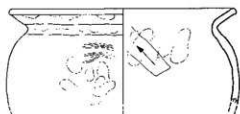
第103团 内無川4地区調査区出土遺物実測図2 (1/4) ()内は調査区



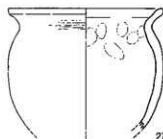
24



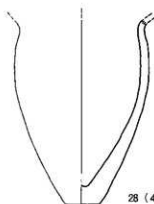
25 (3·C)



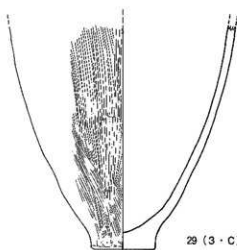
26 (2·L, 6B号整穴)



27 (3·C)



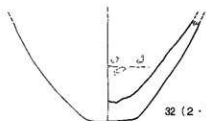
28 (4·K)



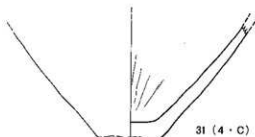
29 (3·C)



30 (4·C)



32 (2·L, 6B号整穴)



31 (4·C)



第104図 内無川4地区調査区出土遺物実測図3 (1/4) ()内は調査区

文が二箇所に付く。

17は壺形土器の胴部である。上半に二条の断面三角突帯文が廻る。胴部最大径は34.5cm。表裏撫で調整。

18は口縁の複合部が大きく外反する。口径は34.5cmで最大径となる。表面ヘラミガキ、横撫で、内面横撫で調整。古墳前期前半の土器。

19は壺形土器の頸部から胴部へ至る破片である。頸部径は5.8cmを測り、一条の断面三角突帯文が廻る。突帯の下には細線が廻り、表面刷毛目、内面撫で調整。表面は赤色顔料を塗っている。

20、21は胴部破片に櫛指波状文を施す。20は二条の櫛指波状文、21は一条の櫛指波状文を施す。表面は撫で、内面は指圧痕を残す。

22～29は壺形土器である。22～24の口縁部は緩く大きく外反し、最大径が口縁にある。口唇は撫で調整で凹線状に取める。胴部の張りは無い。22は表面ヘラ削り、内面撫で調整で、口径31.5cm、頸部径25.5cm、胴部最大径26.7cm。23は表面縦刷毛目、内面指圧痕と撫で調整で、口径19.4cm、頸部径14.8cm、胴部最大径15.7cm。24は表裏撫で調整で、口径27cm、頸部径22.3cm、胴部最大径25.4cm。

25～27の口縁部は断面「く」の字状に外反し、口縁端部は丸く取める。胴部の張りは無い。25は表裏指圧痕と撫で調整で、口径24.4cm、頸部径21.2cm、胴部最大径23.1cm。26は表裏指圧痕と撫で調整で、口径24.4cm、頸部径20.2cm、胴部最大径25cm。27は表面撫で調整、裏面指圧痕と撫で調整で、口径16.6cm、頸部径14cm、胴部最大径16.4cm。28は口縁部欠損した壺形土器。表裏撫で調整で、頸部径13.1cm、胴部最大径14.2cm、底部径3.4cm。29は口縁部～胴部上半を欠損した壺形土器。表面縦刷毛目、内面撫で調整で、胴部最大径24cm+α、底部径6.4cm。

30～41は壺形土器、甕形土器の底部である。30～35は壺形土器の平底部である。30は表面刷毛目、ヘラミガキ、内面撫で調整で、底部径8.3cm。31は表裏面撫で調整で底部径6.6cm。

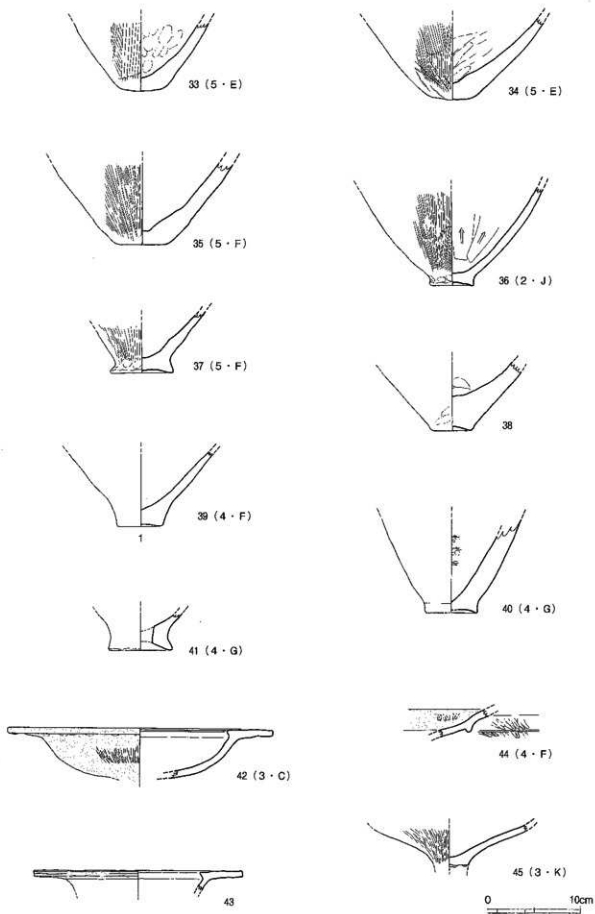
32～35は底部径がやや小さくなり、やや丸底気味に立ち上がるものである。32は表裏撫で調整で底部径3.6cm。33は表面縦刷毛目、内面指圧痕と撫で調整で底部径4.8cm。34は表面縦刷毛目、内面指圧痕と撫で調整で底部径4.6cm。35は表面縦刷毛目、内面撫で調整で底部径5.1cm。

36～41はやや上げ底気味の平底部である。底部側面はやや括れる。36は表面縦刷毛目、内面撫で調整で底部径4.4cm。37は表面縦刷毛目、内面撫で調整で底部径6.7cm。38は底部壁は厚く、底部側面の括れは弱い。表裏撫で調整で底部径4.5cm。39は表裏撫で調整で底部径4.5cm。40は表裏撫で調整で底部径5.5cm。41は高い上げ底で、表裏撫で調整、底部径6.7cmである。

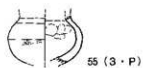
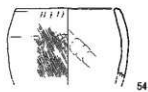
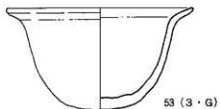
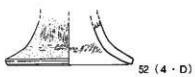
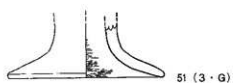
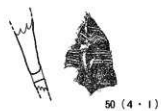
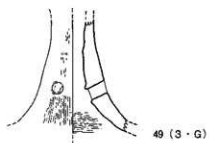
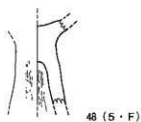
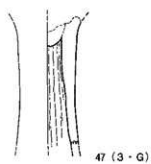
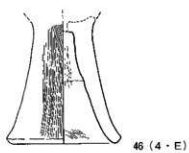
42～52は高坏の破片である。42～45は坏部であり、脚部を欠損している。42～43の口縁部は鋤先状を呈する。42の口縁幅は5cm、表面は縦刷毛目、内面撫で調整で表面に赤色顔料を塗布している。口径18.6cm、口縁最大径28.4cm、坏部の最大深さは5.5cm。43の口縁幅は4.5cm、表裏面は撫で調整で表面に赤色顔料を塗布している。口径13cm、口縁最大径22.2cm。44は高坏としたが、壺の口縁部の可能性もある。

44、45は高坏の坏部である。44は段を持って広がる坏部であり、表裏面はヘラミガキや撫で調整、内面に赤色顔料を塗布している。45の表面は縦刷毛目、内面は撫で調整である。脚部径は4cm。

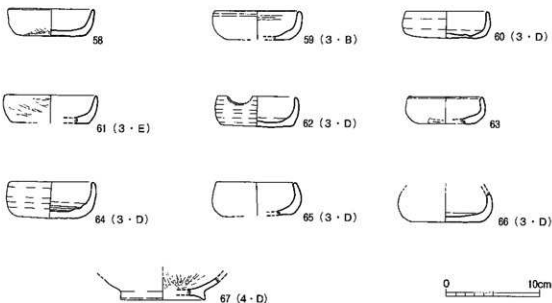
46～52は高坏の脚部である。46は緩やかに広がる脚部である。表面は縦刷毛目、内面は撫で調整である。脚部付け根径は6.2cm、脚部最大径は12.2cm。47は円柱状に長い脚部である。表面は丁寧な撫で調整、内面は絞り痕や撫で調整である。脚部径は5.8cmである。48の脚部は徐々に広がる。表面は丁寧な撫で調整、内面は絞り痕や撫で調整である。脚部径は4.3cmである。49はラッパ状に広がる円形透かしのある脚部である。表面は縦刷毛目、内面は横刷毛目と撫で調整である。脚部付け根径は4.5cm、50は円形透かしのある脚部である。表面は横の線刻と波状文を交互に刻み意匠化している。51、52はラッパ状に広がる脚部である。51の表裏面は横撫で調整である。脚部径は16.6cm。52の表面は縦刷毛目、内面は斜刷毛目と撫で調整である。脚部径は13.4cm。外面に赤色顔料を塗布している。



第105図 内無川4地区調査区出土遺物実測図4 (1/4) ()内は調査区



第106図 内無川4地区調査区出土遺物実測図5 (1/4) ()内は調査区



第107図 内無川4地区調査区出土遺物実測図6 (1/4) ()内は調査区

53は深い鉢形土器である。口縁部は緩く外反し、胴部の張りは無くそのまま丸底に至る特異な形態をしている。表裏面は撫で調整。口径は20cm、器高10.7cm。

54は口縁部内湾し、胴部やや張る単純な器形である。表面は斜刷毛目、内面は撫で調整である。口縁部に5つの爪形文を施している。口径は11.9cm、胴部最大径は13cm。

55は小壺である。頸部は5.4cm、胴部最大径で7.9cmを測る。表面は刷毛目後撫で調整、内面は指押さえと撫で調整である。

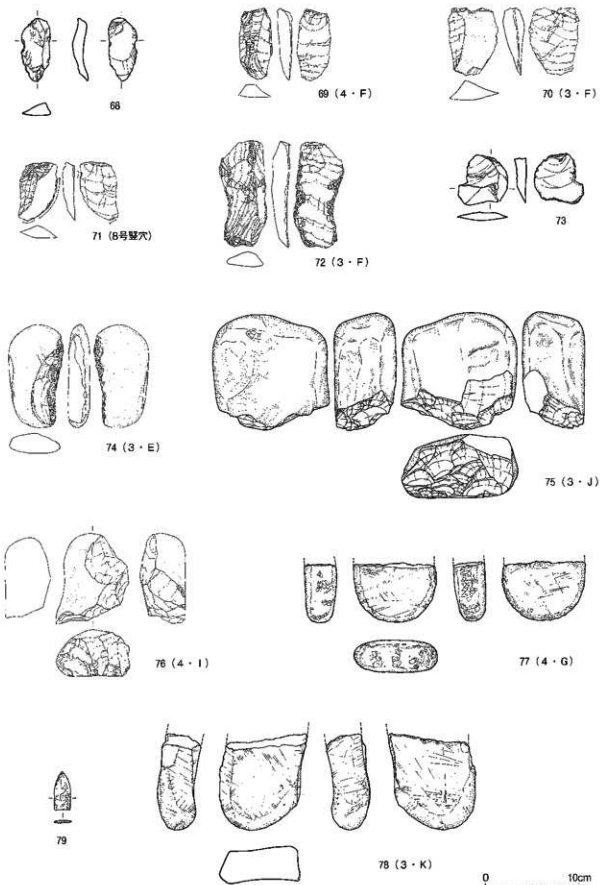
56は手捏ね土器である。土鈴のような形態である。口径は0.7cm、胴部最大径は2.8cm、底部2.1cm、器高2.35cm。

57は須恵器の破片である。表面は格子目叩き、内面平行叩き調整。

58～66は土師器の坏である。平底から丸く立ち上がり、口縁部は直立かやや内湾するものである。底部はヘラ切り離して表裏は撫で調整。58～62の口縁部は直立する。58の口径は9.2cm、胴部最大径は9cm、底部径8.5cm、器高3cm。59の口径は9.2cm、胴部最大径は9.4cm、底部径6.8cm、器高3cm。60の口径は8.9cm、胴部最大径は9.4cm、底部径9.2cm、器高2.9cm。61の口径は9.7cm、胴部最大径は9.9cm、底部径8cm、器高3cm。62の口径は8.3cm、胴部最大径は8.9cm、底部径7.2cm、器高3.2cm。63の口径は7.9cm、胴部最大径は8.5cm、底部5.8cm、器高2.8cm。64の口径は8.9cm、胴部最大径は9.5cm、底部径5.6cm、器高4cm。65の口径は8.4cm、胴部最大径は9.5cm、底部径8cm、器高3.5cm。66の胴部最大径は10cm、底部径7.5cm。

67はいわゆる内黒土器の底部である。底部に高台を付けた坏底部で表面は横撫で、内面はヘラミガキを施す。底径9cmである。

68～73は旧石器時代の流紋岩製の剥片石器類である。68は縦長剥片で左側面に細かな使用痕跡。最大長7.1cm、最大幅3.2cm、厚さ1.2cm、重さ30.4g。69は縦長剥片である。複数の打面調整痕があり、背面には同じ方向の剥離痕跡を複数残している。最大長7.6cm、最大幅3.6cm、厚さ1.6cm、重さ42.6g。70は背面に自然表皮を大きく残した縦長の剥片で、複数の打面調整痕跡を残している。最大長7.1cm、最大幅5.3cm、厚さ2.3cm、重さ64.2g。71も70と似た形態の剥片であるが、打面は単剥離打面で、右側面には微細な使用痕跡を残す。最大長6.2cm、最大幅4.2cm、厚さ1.3cm、重さ28.7g。72は背面の一部に自然面を残す縦長剥片を素材とした削器である。両側面に細かな加工を加えて刃部を形成している。左側面は表裏からの調整が顕著でややコンクリートレイバーの様相を留めている。一方、端部は急角度の加工痕跡があり、掻器としての使用も考えられる。最大長11.1cm、最大幅5.2cm、厚さ1.9cm、重さ102.5g。73の縁辺には細かい使用痕跡が



第108図 内無川4地区調査区出土遺物実測図7 (1/4) ()内は調査区

認められる。最大長5.7cm、最大幅5.5cm、厚さ0.75cm、重さ32.1g。

74~76は礫器である。74は扁平な楕円状の川原礫に表裏から一側辺に加工を施した礫器である。片方の側辺には敲打痕跡が確認できる。安山岩製で最大長10.9cm、最大幅5.8cm、厚さ2.3cm、重さ213g。75はやや扁平な川原礫の片面から急角度の加工を複数加えたチョッパー。流紋岩製で、最大長12.2cm、最大幅12.4cm、厚さ6.6cm、重さ1.2kg。76はバチ型に広がる形態で、片面から急角度の加工を複数加えたチョッパー。最大長9.5cm、最大幅7.8cm、厚さ4.9cm、重さ419.6g。75、76は剥離面の風化が顕著であり、自然表皮との色調は酷似している。一見古めかしく感じる。

77は扁平な川原礫の磨石・敲石である。表裏面は磨られ、側辺の周囲は敲打痕を残している。半分は欠損している。最大長6.2+ α cm、最大幅8.7cm、厚さ3.5cm、重さ382.4+ α g。78は砥石である。扁平な川原礫の表裏と両側面の4面を使用している。よく使い込まれたもので、大きく窪んで変形している。最大長10.9cm、最大幅10cm、厚さ3.3~3.9cm、重さ499.1g。

79は磨製の石鎌である。平基式で最大長4.1cm、最大幅1.8cm、厚さ0.2cm、重さ3.2g。

4 小 結

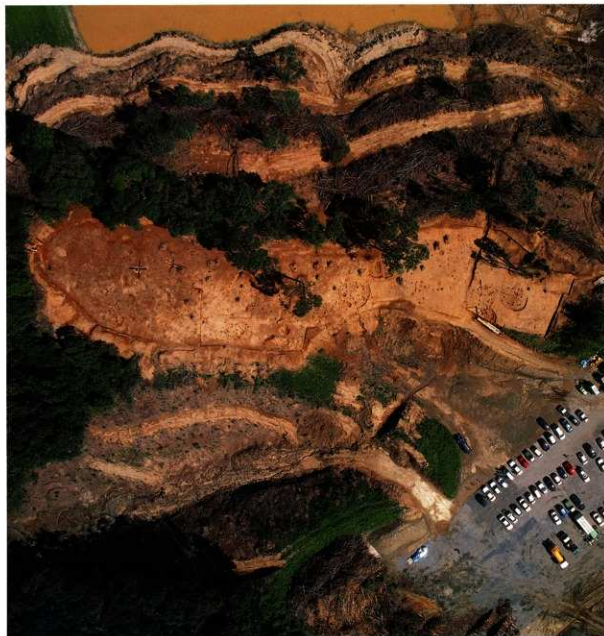
内無川4地区は岡道跡群の中でも標高の一番高い細長い丘陵上に位置している。調査面積は幅約20mで長さ約125mの約2,500m²である。細長い丘陵の中心部は、やや低い鞍部状を呈する。弥生時代後期の竪穴住居跡は、丘陵の基部を中心に鞍部にかけて約10基が遺存しており、丘陵の北端部には竪穴住居跡の残映が僅かに残っている程度である。この現象は一見、基部付近の集落と北端部付近の墓地という場の機能差とも推察できるが、丘陵の北端部には表土下に薄いアカホヤ層が残存しており、この層に小児用カメ棺墓の基底部のみがかるうじて遺存している状況を総合的に判断すると、竪穴住居跡は後世の自然的要因で削平を受けたものと推察できそうである。その証左として、この一帯には弥生時代後期の土器片が点在していることを掲げることができる。

竪穴の炉跡の炭化物の放射性炭素の年代測定（AMS測定）結果は、6号竪穴炉跡で1990±40yrBP、7号竪穴炉跡で2020±40yrBP、8号竪穴炉跡で1000±30yrBP、9号竪穴炉跡と土坑で1970±30yrBP、2000±40yrBP、10号竪穴の土器片付着炭化物で2140±40yrBPであった。

小児用カメ棺墓は5基出土しているが、その内3基は丘陵の北端部に纏まっている様子である。

その他の遺構としては、旧石器時代～縄文早期の集石遺構4基と古代～中世の炭窯7基が検出されている。集石遺構は拳大の角礫を集めたもので、基底部には人頭大の川原礫が花弁状に配置されていた。礫は赤褐色に変色しており集石炉として機能していたことが判る。このような集石遺構は南方の丹生遺跡からも出土しており縄文早期の初頭期頃の所産であると推察された。

一方、古代の炭窯は7基が検出されている。形態は何れも長楕円形を呈し、床面は自然地形の傾斜に沿って緩い傾斜が認められる。炭窯は丘陵の基部～鞍部にかけて分布している。その分布は緩い弧状の谷を扇の要として、放射状に展開している様相を呈する。炭窯の覆土には焼土や炭化物が充填されていた。炭化物は微細な粉末状を呈し黒光りしていた。炭窯は当初中世～近世の所産と推量していたが、放射性炭素の年代測定（AMS測定）結果は1号炭窯で900±30yrBP、3号炭窯で870±40yrBP、5号炭窯で880±30yrBP、6号炭窯で1190±30yrBP、7号炭窯で900±30yrBPであった。平安時代後半から鎌倉時代前半頃の炭窯であることが判明している。



内無川4地区 空中写真 (西から)



内無川4地区 調査区 (南から)

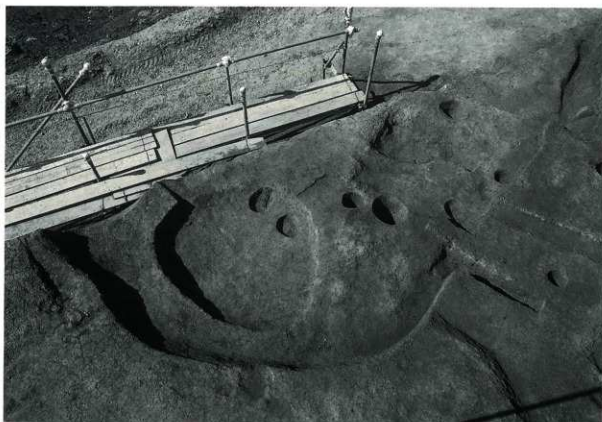


内無川4地区 発掘調査風景 (南から)

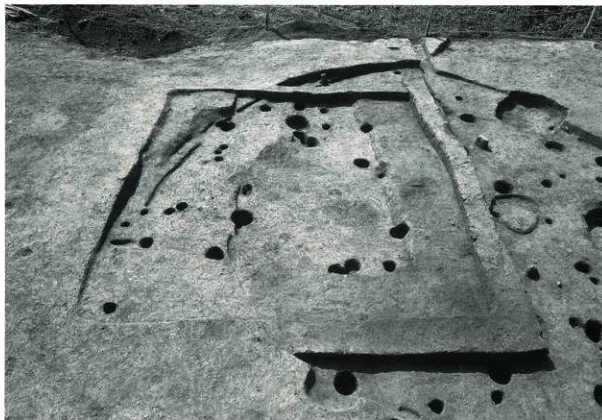
内無川4地区 調査区 発掘風景



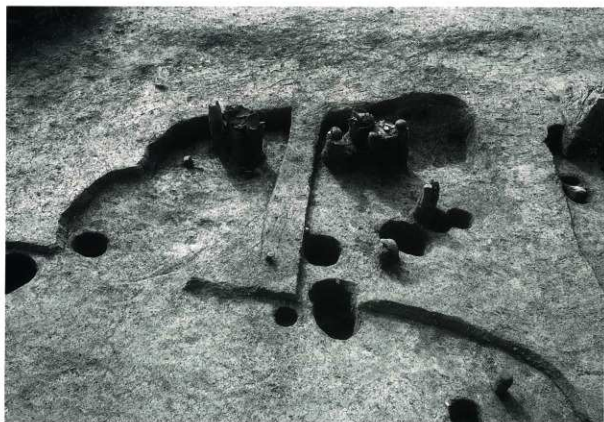
内無川4地区 1号竪穴出土状態（北から）



内無川4地区 2号竪穴、11号土坑出土状態（東から）



内無川4地区 3号竪穴出土状態(東から)



内無川4地区 4号竪穴出土状態(東から)



内無川4地区
4号竪穴遺物出土
状態（東から）



内無川4地区
5号竪穴出土状態
（東から）



内無川4地区
6A号竪穴出土状態
（東から）



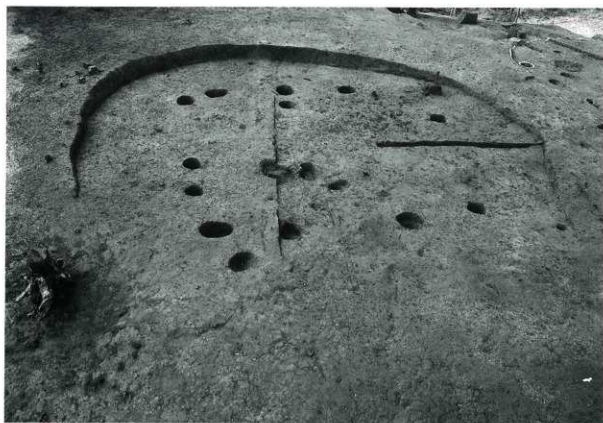
内無川4地区 6B号竪穴出土状態(東から)



内無川4地区 7号竪穴出土状態(東から)



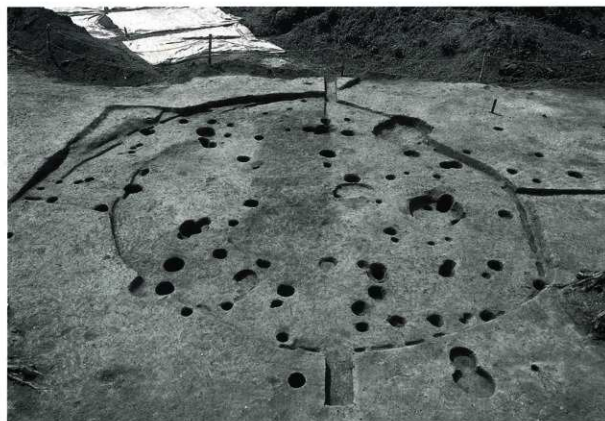
内無川4地区 8号竪穴遺物出土状態 (東から)



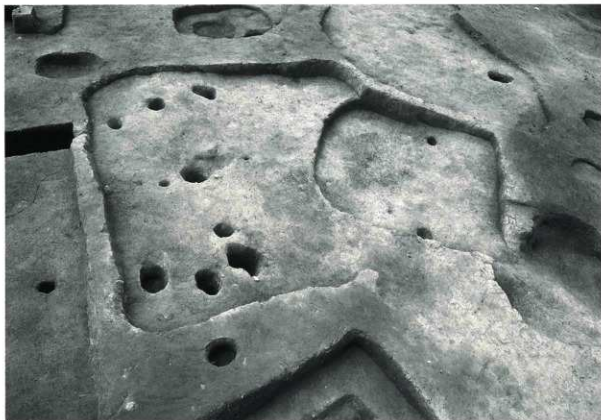
内無川4地区 8号竪穴出土状態 (東から)



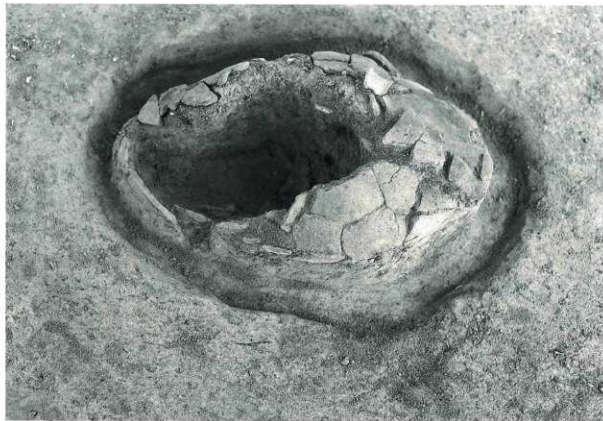
内無川4地区 9号竪穴出土状態（東から）



内無川4地区 10号竪穴出土状態（東から）



内無川4地区 11号竪穴、10号土坑出土状態（北から）



内無川4地区 1号カメ棺墓出土状態(西から)



第67図-1 (1号カメ棺)



第67図-2 (1号カメ棺)



内無川4地区 2号カメ棺墓出土状態 (南から)



第69図-1 (2号カメ棺)



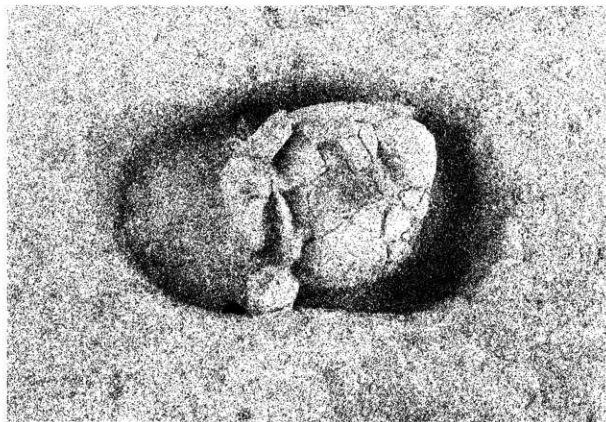
第69図-2 (2号カメ棺)



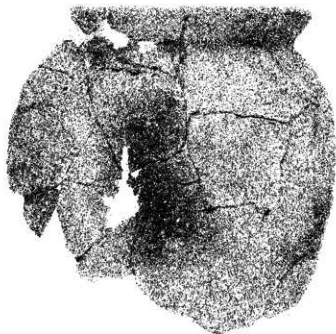
第69図-3 (2号カメ棺)



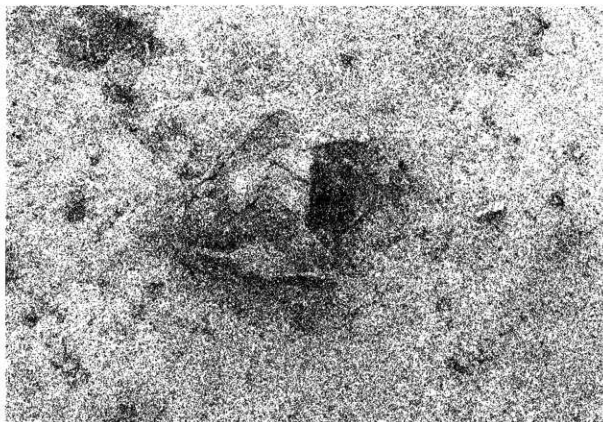
第69図-4 (2号カメ棺)



内無川4地区 3号カメ楕出土状態（西から）



第71図-1（3号カメ楕）



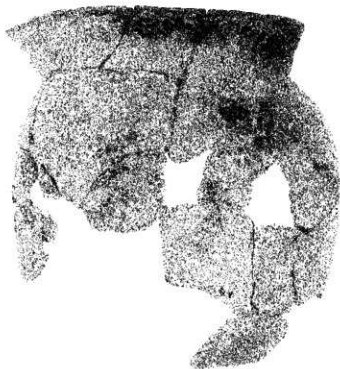
内無川4地区 4号カメ棺出土状態（東から）



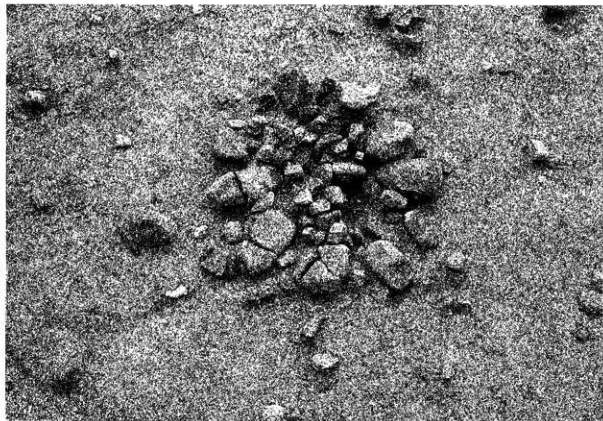
第73図-1（4号カメ棺）



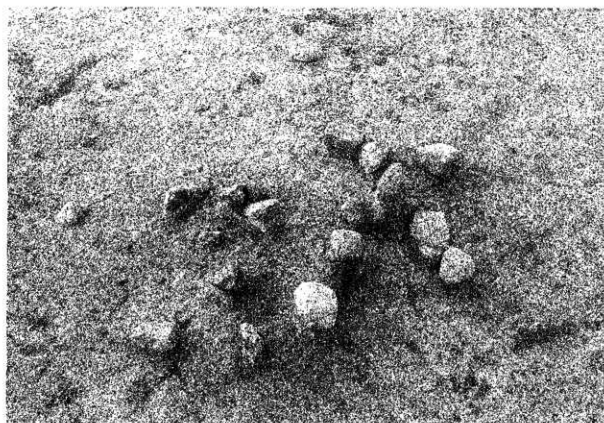
内無川4地区 5号カメ棺墓出土状態（東から）



第75図-1（5号カメ棺）



内無川4地区 1号集石出土状態(東から)



内無川4地区 2号集石出土状態(東から)



内無川4地区 3号集石出土状態 (東から)



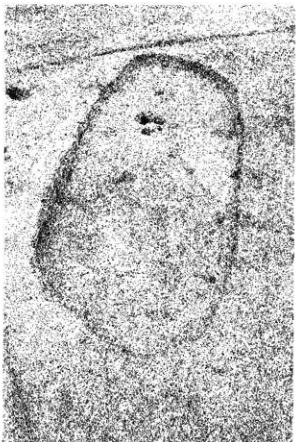
内無川4地区 4号集石出土状態 (南から)



内無川4地区 1号炭窟出土状態 (南から)



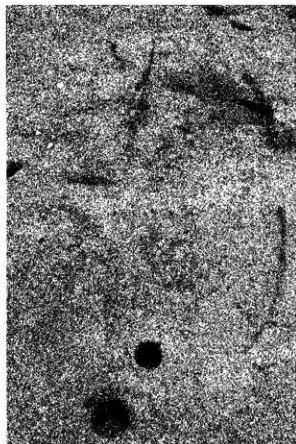
内無川4地区 2号炭窟出土状態 (南から)



内無川4地区 3号炭窟出土状態 (南から)



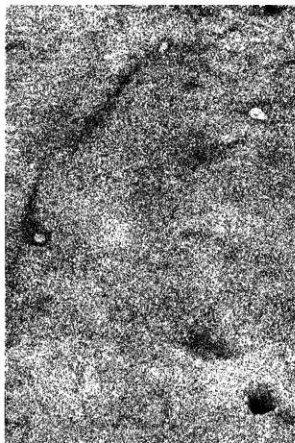
内無川4地区 4号炭窟出土状態 (東から)



内無川4地区 5号炭窯出土状態 (西から)



内無川4地区 6号炭窯出土状態 (西から)



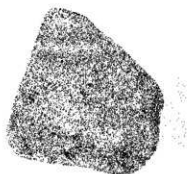
内無川4地区 7号炭窯出土状態 (東から)



内無川4地区 1号土坑遺物出土状態（北から）



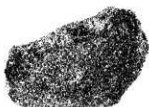
内無川4地区 1号土坑出土状態（西から）



第39図-1 (1号竪穴)



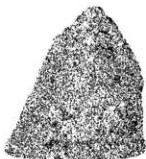
第39図-3 (1号竪穴)



第39図-5 (1号竪穴)



第41図-3 (2号竪穴)



第43図-2 (3号竪穴)



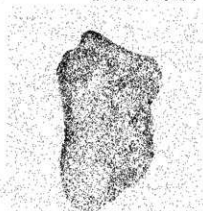
第43図-6 (3号竪穴)



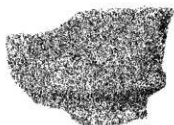
第43図-7 (3号竪穴)



第43図-8 (3号竪穴)



第43図-17 (3号竪穴)



第45図-1 (4号竪穴)



第45図-2 (4号竪穴)



第45図-3 (4号竪穴)

内無川4地区 1号、2号、3号、4号竪穴出土遺物



第45図-5 (4号竪穴)



第45図-6 (4号竪穴)



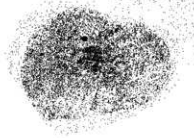
第45図-10 (4号竪穴)



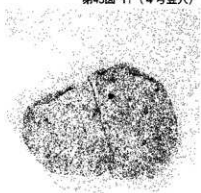
第45図-11 (4号竪穴)



第45図-12 (4号竪穴)



第45図-13a (4号竪穴)



第45図-13b (4号竪穴)



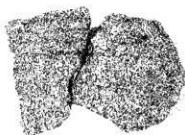
第45図-14a (4号竪穴)



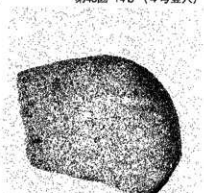
第45図-14b (4号竪穴)



第47図-1 (5号竪穴)



第47図-2 (5号竪穴)



第47図-6 (5号竪穴)

内無川4地区 4号、5号竪穴出土遺物



第49図-3 (6A号竪穴)



第49図-4 (6A号竪穴)



第49図-5 (6A号竪穴)



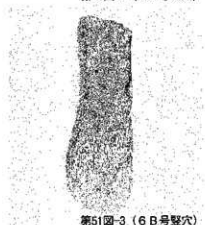
第49図-6 (6A号竪穴)



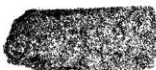
第49図-11 (6A号竪穴)



第51図-2 (6B号竪穴)



第51図-3 (6B号竪穴)



第53図-1 (7号竪穴)



第53図-7 (7号竪穴)



第53図-9 (7号竪穴)



第55図-1 (8号竪穴)

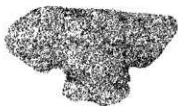


第55図-3 (8号竪穴)

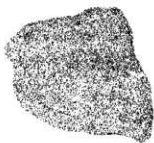
内無川4地区 6A号、6B号、7号、8号竪穴出土遺物



第55図-4 (8号壁穴)



第55図-6 (8号壁穴)



第55図-7 (8号壁穴)



第55図-9 (8号壁穴)



第55図-10 (8号壁穴)



第55図-11 (8号壁穴)



第55図-13 (8号壁穴)



第55図-14 (8号壁穴)



第55図-15 (8号壁穴)



第55図-19 (8号壁穴)



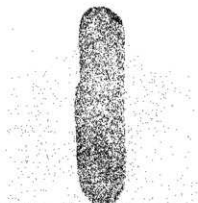
第55図-22 (8号壁穴)



第55図-23 (8号壁穴)

内無川4地区 8号壁穴出土遺物

写真図版31



第56図-24 (8号竪穴)



第56図-25 (8号竪穴)



第59図-1 (9号竪穴)



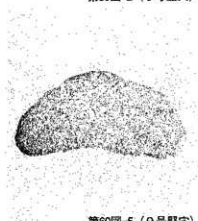
第59図-2 (9号竪穴)



第59図-3 (9号竪穴)



第60図-4 (9号竪穴)



第60図-5 (9号竪穴)



第62図-1 (10号竪穴)



第62図-4 (10号竪穴)



第62図-6 (10号竪穴)



第62図-7 (10号竪穴)



第62図-9 (10号竪穴)

内無川4地区 8号、9号、10号竪穴出土遺物



第65図-1 (12号竪穴)



第66図-2 (12号竪穴)



第65図-3 (12号竪穴)



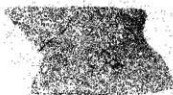
第77図-1 (1号土坑)



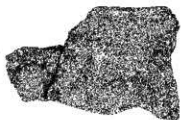
第77図-2 (1号土坑)



第77図-3 (1号土坑)



第77図-5 (1号土坑)



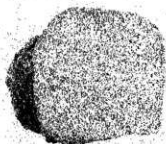
第77図-6 (1号土坑)



第77図-7 (1号土坑)



第81図-1 (4号土坑)



第91図-1 (1号集石遺構)



第102図-1 (2・J)

内無川4地区 12号竪穴、1号土坑、4号土坑、1号集石遺構、2J区出土遺物



第102図-2 (3・F)



第102図-3 (3・I)



第102図-4 (4・C)



第102図-6 (4・D)



第102図-7 (4・F)



第102図-8 (4・E)



第102図-9 (4・I)



第102図-10 (3・G)



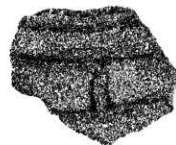
第102図-11 (4・C)



第103図-13 (4・J)



第103図-4 (4・D)



第103図-15 (4・K)

内無川4地区 3・F~4・K 出土遺物



第103図-16 (4・I)



第103図-17 (4・C)



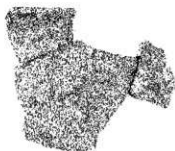
第103図-18 (4・D)



第103図-19 (3・C)



第103図-21 (3・I)



第103図-22 (4・J)



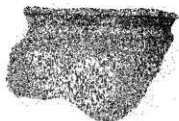
第103図-23 (3・I)



第104図-24



第104図-25 (3・C)



第104図-26 (21.6 B 壁穴)



第104図-27 (3・C)



第104図-28 (4・K)

内無川4地区 4・I~4・K 出土遺物



第104図-29 (3・C)



第104図-30 (4・C)



第104図-31 (4・C)



第104図-32 (21.6 B 壁穴)



第105図-33 (5・E)



第105図-34 (5・E)



第105図-35 (5・F)



第105図-36 (2・J)



第105図-37 (5・F)



第105図-40 (4・G)



第105図-41 (4・G)



第105図-42 (3・C)

内無川4地区 3・C～4・G出土遺物



第105図-43



第105図-44 (4・F)



第105図-45 (3・K)



第106図-46 (4・E)



第106図-47 (3・G)



第106図-48 (5・F)



第106図-49 (3・G)



第106図-50 (4・I)



第106図-51 (3・G)



第106図-52 (4・D)

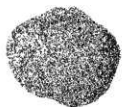


第106図-53 (3・G)



第106図-54

内無川4地区 4・F~3・G出土遺物



第106図-55 (3・P)



第106図-56



第107図-62 (3・D)



第107図-64 (3・D)



第107図-65 (3・D)



第108図-71 (8号壁穴)



第108図-72 (3・F)



第108図-74 (3・E)



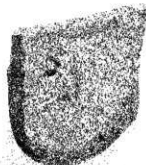
第108図-75 (3・J)



第108図-76 (4・I)



第108図-77 (4・G)



第108図-78 (3・K)

内無川4地区 3・P~3・K出土遺物